Oriental
Lib.
PL
758.15
S8
J

萬葉集新釋

不許複製

昭和二十二年二月二十日印刷
昭和二十二年二月廿五日發行

著作者 末政寂仙

發行者 須磨德之助
大阪市福島區茶園町八一番地

印刷者 株式會社井村印刷所
代表者 井村雅有
兵庫縣津名郡志筑町

發行所 學修社
大阪市福島區茶園町八一番地

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地

定價金拾圓

を願ふことである。

三年（天平寶字）、春正月一日、因幡國廳に於て、饗を國の郡司等に賜へる宴の歌一首

（三〇九）新しき年のはじめのはつ春の今日降る雪のいやしけよごと。

右の一首は、守大伴宿禰家持之を作る

【語釋】◎因幡國廳　家持が因幡守に任ぜられたのは、天平寶字二年六月である。◎いやしけ　いよいよ重なれ。◎よごと　吉き事。

【通釋】新しく迎へた年の始めの今日しも、初春のめでたい兆として、降り積つた雪のやうに吉い事もますます積り重なつてくれ。

【批評】年頭の祝意がよくあらはれてゐる。この歌が萬葉集の最後にあるもので、而も萬葉集中最も年代の新しい作である。天平寶字三年と云へば、人皇四十七代淳仁天皇の即位の翌年で、今を去る千百八十餘年前である。

萬葉集新釋　終

【批評】これは、ある防人の妻の詠んだ歌であると思はれる。多くの見送りの人の中に、ただ一人淋しさうに佇んでゐる作者のいたましい面影が浮んでくる。

【批評】家持の作である。病に臥しては、さすが家持もしみじみ人生のはかなさを考へずにはゐられなかつたらう。

【批評】やはり家持の作である。佛教の無常思想の影響である。

【語釋】◎からごろも　袂の枕詞。◎子ら　「ら」は接尾辭。◎來ぬや　來ぬるよの意。◎母なしにして　子供の母、作者の妻は死んでこの世にゐないのである。

【通釋】出發する時、自分の着物の袂に取りすがつて泣く子供を致方なく家に留めて來たことだ、あの子には母も死んでゐないのに、可愛さうなことだ。

（三〇六）防人(さきもり)に行くは誰が夫(せ)と問ふ人を見るがともしさ物思(も)ひもせず。

【語釋】◎見るがともしさ　見るのが羨しい。

【通釋】あそこを、今度防人にされて行つてゐるのは、一體誰の夫であらう……と路傍に立つて、何の物思ひもなささうに噂してゐる人を見ると、その人の境遇が羨しい。

病に臥して無常を悲しみ、修道を欲して作れる歌

（三〇七）うつせ身は數なき身なり山川のさやけき見つゝ道をたづねな。

【語釋】◎うつせ身　現身。◎數なき身　いくばくも生きられない身。◎道　佛道。

【通釋】この現身はいくらも生きられないはかない身である。いつそ、青い山川の間を放浪して、佛道修行をしたい。

壽(よはひ)を願ひて作れる歌

（三〇八）水沫(みなわ)なす假れる身ぞとは知れれども猶し願ひつ千歳(ちとせ)の命を。

【語釋】◎水沫なす　水の泡の如き。はかないこと。◎假れる身　ほんの一時の假りの身。

【通釋】水の泡のやうに、あるかと見ればすぐ消えてしまふ假りの身だとは知りながら、やはり千年の壽

時のあわただしかつたことが想像される、どんなにか名殘のつきなかつたことであらう。

【批評】いぢらしい妻の姿が讀者の眼前にも彷彿として浮んでくる。

【批評】忠と孝の精神のこもつた作である

【批評】實に悲壯な親子の別離である。

右の一首は上丁有度部（ウトベ）牛麿

語釋　◎水鳥の　たちの枕詞。　◎ものはずけにて　物言はず來にて、である。

通釋　出發の急しさに取り紛れて、ゆつくりと父母に物も言はないで來てしまつたのが今となつては悔しい。

（三〇三）蘆垣のくまどに立ちてわぎもこが袖もしほほに泣きしぞおもほゆ。

右の一首は市原郡上丁刑部直千國

語釋　◎くまど　隅の處。　◎わぎもこ　我妹子で、妻のこと。

通釋　蘆の垣の隅のもの蔭に立ち隠れて、人目を避けて見送るわがいとしい妻が袖もしほしほと泣いてゐた姿が面影に見えて忘れられない。

（三〇四）大君のみことにされば父母を齋瓮（いはひべ）と置きてまゐで來にしを。

右の一首は結城郡雀部廣島

語釋　◎みことにされば　みことにしあれば、の約。　◎齋瓮と置きて　齋瓮のやうに大切に齋ひ置いて。「齋瓮」は、古昔、神酒を神に奉るときに用ゐた陶器。

通釋　大君の勅令であるから、氣がかりではあるが、父母を齋瓮のやうに大切に留め置いて來たことである。

（三〇五）からごろも袂に取りつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母（おも）なしにして。

右の一首は國造丁小縣郡他田舎人大島

二十三日（天平勝寶五年二月）興に依りて作れる歌二首

（一九九）春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも。

【語釋】◎うら悲し　心悲しい。

【通釋】春の野に霞がずつとたなびいてゐて、折しも夕日の薄くさしてゐる中に鶯が鳴いて何とはなしにもの悲しい。

【批評】景と云ひ情と云ひ、まことにもの哀れな感をそゝる。

（二〇〇）わが宿のいささ村竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも。

【語釋】◎いささ村竹　葉の繁つた群竹。◎かそけき　かすかな。

【通釋】わが宿の葉の繁い群竹にさらさらと風が吹いてかすかな音を立てゝゐる夕べである。

【批評】いかにも静かで穏かな春の夕べのおもむきが一首の調にかすかに流れてゐる。二首とも大伴家持の作である。

二十五日作れる歌

（二〇一）うらうらに照れる春日に雲雀あがり心悲しもひとりし思へば。

【語釋】◎うらうらに　うららかに。

【通釋】うらうらと照り渡る春の日に、雲雀が囀りながら空高く上つて行く。それを只一人物思ひに耽りながら聞いてゐると、何となく哀れが胸に湧いてくる。

【批評】これも家持の作である。何とはなしに春の悩ましさがしみじみと感ぜられてくる。

巻二十

（二〇二）水鳥のたちのいそぎに父母にものはずけにて今ぞくやしき。

【批評】出發の

る。

【批評】爽快な感がある。

【批評】これは長歌の反歌である。名を重んじた上代の思想が伺はれる。

【批評】莊重の調悠容として迫らざるところ遠く海外に向ふ使臣におくるにいかにもふさはしい

【通釋】夜更けに目を覺してゐると、川瀬を尋ねて、人の心をしほれさすほど千鳥が淋しさうに鳴くことである。

遥に江を泝る船人の唱ふを聞く歌

（一九六）朝床に聞けば遥けし射水川朝漕ぎしつゝ歌ふ船人。

【語釋】◎射水川　庄川とも云ふ。越中國の西部にある川。古稱雄神川。

【通釋】朝早く目がさめて、床の中で聞いてゐると、射水川を漕いで行く船人の歌が遥かに聞える。

勇士の名を振ふ歌

（一九七）ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね。

【語釋】◎つぐがね　ついでくれるやうに。「がね」は願望の詞。

【通釋】大丈夫たるものは、立派な名を立てるべきである。後世に聞きつぐ人々も語り傳へて、永くその名の傳はるやうに。

閏三月、天平寶字四年衛門督大伴古慈悲宿禰の家にて入唐副使同じき胡麿宿禰等を餞せる歌

（一九八）唐國に行き足らはして歸り來むますらたけをに御酒たてまつる。

【語釋】◎入唐副使大伴胡麻呂　旅人の姪、この時の大使は藤原清河で、今一人の副使は、吉備眞備であつた。◎行き足らはして　行つた任務を完全に果して。◎ますらたけを　大丈夫。

【通釋】唐國へ行つて、大任を完全に果してお歸りになるべき大丈夫に、謹んでこの御酒を獻じます。

【批評】 先祖をほこり、名譽を重んずる思想が伺はれる

【批評】 紅の桃の花と云ひ少女と云ひ、實に艷美な光景である。

【批評】 情景ともにまことに哀れな歌であ

通釋 この度わが天皇の幸はへ惠み給ふ有り難い詔を承るにつけても、我等大丈夫としての心がいよいよ勇み立つのをおぼえることである。

（一九三）大伴の遠つ神祖のおくつきはしるく標立て人の知るべく。

語釋 ◎おくつき　墓。◎しるく　いちじるしく。はつきりと。◎標　しるし。

通釋 國家の勳功の多かつたわが大伴家の祖先の墳墓は、そことはつきり世間の人に知れるやうに、高く築き上げよ。

卷十九

天平勝寶二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺矚して作れる歌

（一九四）春の苑くれなゐにほふ桃の花下照る道に出で立つ少女。

語釋 ◎下照る　桃の花の色の映つてゐること。

通釋 紅色に咲き匂ふ桃の花が美しく下の道に映つてゐる春の苑に今しも美しい少女が立つてゐる。

夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌

（一九五）夜くだちにねざめてをれば河瀬とめ心もしぬに鳴く千鳥かも。

語釋 ◎夜くだち　夜更けに。◎とめ　尋ね求めて。◎心もしぬに　心の萎れるばかりに。

にふさはしい

【批評】これも同じ時の作である。情景よく一致してゐる。

【批評】これは、左大臣橘卿の邸宅で御酒宴のあつた時、席に列してゐる女王が詠んだものであるそれで、一二句は橘氏の繁榮を壽ぐ意が含まれてゐる

紀朝臣清人、詔に應ずる歌

（一九〇）天の下すでにおほひて降る雪の光を見れば貴くもあるか。

語釋 ◎すでに　全く。悉く。あまねく。◎貴くもあるか　尊いことであるよ。「か」は感動の助詞。

通釋 地上にあまねく降り積つた雪のやうに、隅々までも輝き渡る陛下の御稜威を仰ぎ見ますれば、まことに貴いことでございます。

巻十八

河内女王の歌

（一九一）橘の下照る庭に殿立てゝさかみづきいますわが大君かも。

語釋 ◎河内女王　高市皇子の御女。◎下照る　橘の實の色が地上に映ずること。◎殿　御殿。◎さかみづき　酒宴を催すこと。◎大君　元正天皇。

通釋 橘の實の色がぱつと映り輝く庭に、高殿を立てゝ盛な御酒宴を催してゐらせられる、わが大君の貴いことよ。

反歌

（一九二）ますらをの心おもほゆ大君のみことの幸（さち）を聞けば貴み。

語釋 ◎ますらをの云々　大丈夫の心が一層勇み立つのをおぼえる。◎貴み　貴い故に。

云ふことが左註にある。歌語が實に露骨でいかにも眞情が流露してゐる。

【批評】田舍の居酒屋で大の男が罵られて、何ともよう云はないで、しよんぼりとしてゐる姿が浮んでくる。

【批評】これは、天平十八年正月、雪の多く降り積つた日に、太上天皇の御前で諸臣が宴を賜うた時、雪の歌を賦せよとの勅に依つて、左大臣橘諸兄が奉つた歌であることが詞書にある。莊重謹嚴な調が國家の老臣の作たる

〔通釋〕御飯を食べてもおいしくもない、歩いてゐても少しも心が落ちつかない。ただ君の御心が忘れられないで、戀しくてたまらない。

能登國の歌

（一八八）はしだての　熊來酒屋に　まぬらる奴わし　誘ひたて　率て來なましを　まぬらる奴わし。

〔語釋〕◎はしだての　枕詞。◎熊來　能登の海岸の地名。◎まぬらる　罵られる。◎奴わし「わし」は、囃し詞。

〔通釋〕熊來の酒屋で罵られてゐる奴よ、誘ひたてゝ連れて來てやりたいものを、可愛さうにあんなに罵られてゐる。

巻十七

左大臣橘宿禰、詔に應ずる歌

（一八九）ふる雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか。

〔語釋〕◎ふる雪の　景物を借りて白髪の枕詞としたのである。◎大君　元明天皇。

〔通釋〕今日降り積みました雪のやうに、白髪を戴くまで永らへて、わが大君に仕へ奉り、かく御恩澤を蒙ることを思ひませば、まことに辱いことであります。

とを反對に云つたので、「鬘なし」もやはり事實の反對である。そこにおもしろ味がある。

【批評】譬喩が奇抜である。

【批評】中々辛辣な戯れである。

【批評】人生の無常を歌つたものである。しみじみと味はひの深い歌である。

【批評】橘諸兄の弟の佐爲王に召使はれてゐた下婢が、夫と別れ別れになつてゐるのを歎いて、宿直の夜に詠んだ歌で、この歌を王が聞いて、永く宿直を許したと

【語釋】◎鬚の剃杭　この法師は鬚が濃くて、剃つたあとが青く見えたので、それを杭に譬へたのである。◎いたくな引きそ　ひどく引つ張るな。

【通釋】坊さんの鬚の剃杭に馬を繋いで、あまりひどく引つぱるな、痛がつて坊さんが泣くだらう。

法師の報ふる歌

（一八五）檀越やしかもな言ひそさとをさが課役はたらば汝も泣かまし。

【語釋】◎檀越　檀家。◎しかもな言ひそ　そんなことを云ふな。◎さとをさ　村長。◎えつき　租税。◎はたる　催促する。

【通釋】檀家の人よ、人のことをそんなに云ふものではない。お前さんかて、村長が來て、租税を催促したら泣くだらうに。

（一八六）いさなとり海や死にする山や死にする死ねこそ海は潮干て山は枯れすれ。

【語釋】◎いさなとり　海の枕詞。◎死にする　死ぬる。◎死ねこそ　死ねばこそ、である。

【通釋】海は死ぬるだらうか、又、山は死ぬるだらうか、そんなことはないと思つてゐたが、死ぬるからこそ、あのやうに海には潮の干ることがあるし、山には枯れると云ふことがあるのだ。

夫君に戀ふる歌

（一八七）飯はめど　甘くもあらず　行き往けど　安くもあらず　あかねさす　君が心し　忘れかねつも。

【語釋】◎あかねさす　君の枕詞。

【批評】歌そのものとしては大して勝れてはゐないが、歌の德に關する傳說の最も古いものゝ一つとして注意すべき作である。

【批評】これは新田部皇子が勝間田の池を御覽になつてからお還りになつて、その景色を忘れ難く思召し、侍女に今日勝間田の池を見て來たが、小波に映る蓮の花が大變美しかつたとお話しになつたので、その女が戯に詠んだ歌である事が、左註に漢文で書いてある。「蓮なし」と云つてもその實、蓮の多くあるこ

卷十六

（一八二）安積山影さへ見ゆる山の井の淺き心をあが思はなくに。

右の歌は傳へ云ふ。葛城王、陸奥國に遣されし時、國司祗承緩怠異に甚し。時に王の意悅ばず。怒の色面に顯る。飮饌を設けしかども肯て宴樂せざりき。こゝに前の采女あり。風流の娘子なり。左の手に觴（サカズキ）を捧げ右の手に水を持ち、王の膝を擊ちて、此の歌を詠みき。こゝに乃ち王の意解けて、樂飮せること終日なりき。

語釋 ◎安積山　岩代國安積郡にある。　◎山の井　淸水の湧き出る泉。上三句は「淺き」の序である。

通釋 安積山の影まで映つてゐる、この泉の淺いやうに、自分はあなたを決して淺く、おろそかには思ひはいたしませんのに、どうしてそんなに不興氣にしてゐられるのですか。

新田部親王に獻れる歌

（一八三）勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が鬚なき如し。

語釋 ◎新田部皇子　天武天皇の皇子。　◎勝間田　大和生駒郡都跡（ミヤト）村大字六條砂村。

通釋 勝間田の池は私はよく存じてをります、蓮は一本もありません。さう仰つしやる君のお顏に鬚がないと同じやうに。

戯に僧を嗤る歌

（一八四）法師らが鬚の剃杭馬繫ぎいたくな引きそ法師泣かまし。

【批評】いかにも爽やかな快い光景である。

【批評】いかにもひつそりとした、心細い感じである。

【批評】旋頭歌である。見えるべきはづはないのであるが何となく見えるやうに思へば旅の心も慰められるだらう。よく人の眞情を歌つてゐる。

【批評】中臣朝臣宅守が花鳥に寄せて思を陳べて作つた七首中の一首である。煩悶の情がよくあらはれてゐる。

（一七六）月よみの光を清み夕なぎに水手(かこ)の聲呼び浦を漕ぐかも。

語釋　◎長門浦　安藝の倉橋島の南方の本浦の舊名。　◎月よみ　月のこと。　◎清み　清い故に。　◎水手　舟子のこと。　◎聲呼び　大聲で呼び立てること。

通釋　月の光がさやかに照らしてゐるので、夕方海上の波の穏かなのを幸ひと、舟子どもが大聲で呼び立てながら、浦邊を漕ぎ廻つてゐる。

（一七九）山の端に月傾けばいざりするあまのともし火沖になづさふ。

語釋　◎いざりする　漁獵する。　◎あま　漁夫。　◎なづさふ　漂ふ。

通釋　山の端に月が傾くと、漁獵をする漁夫のいざり火が沖の方にあちこちに漂ふのが見える。

（一八〇）ぬば玉の夜渡る月ははやも出でぬかも海原の八十島のうへゆ妹があたり見む。

語釋　◎ぬば玉の　夜の枕詞。　◎出でぬかも　出てくれよ。出てほしい。　◎八十島　多くの島々。

通釋　夜を照らし行く月は早く出てくれるといゝ、海上の島々の上から遙かあなたの妻のゐるあたりを見たい。

（一八一）心なき鳥にぞありけるほとゝぎすもの思(も)ふ時に鳴くべきものか。

語釋　◎心なき　無情な。

通釋　情知らずの鳥ではある、ほとゝぎすよ、このやうにくよくよ物を思つてゐる時に鳴いて一層もの思ひをますと云ふことがあるものであらうか。

【鑑評】妻の贈つた歌である。名殘を惜しむ中にもなかなか心のしつかりしたところが見える

【鑑評】これは夫の妻に贈つた歌である。妻を案じる眞情があらはれてゐる。

【鑑評】鶴の聲に何となく旅の哀愁をおぼえたのである

卷十五

新羅に遣はさるゝ使人等別を悲しみて贈答し、及海路に情を慟み思を陳ぶ。併に所に當りて誦詠せる古歌

(一七五) 大船を荒海(あるみ)に出しいます君つゝむことなくはや歸りませ。

【語釋】◎います 行くの敬語。 ◎つゝむことなく 恙なく。

【通釋】大船を荒海に漕ぎ出していらつしやる夫よ、どうか恙なく早くお歸り下さい。

(一七六) わが故に思ひな痩せそ秋風の吹かむその月逢はむもの故。

【語釋】◎思ひな痩せそ 心配の思ひに痩せるな。 ◎逢はむもの故 逢ふのだから。

【通釋】自分のことをあまり心配して、そのために痩せるやうなことをしてくれるな。秋風の吹く頃になつたら、歸つて來て再び逢へるのだから。

(一七七) あさびらき漕ぎ出て來れば武庫の浦の潮干の潟にたづが聲すも。

【語釋】◎あさびらき 朝 船出すること。 ◎武庫の浦 攝津の國にある。 ◎漕ぎ出て來れば 難波の津を漕ぎ出たのである。 ◎たづ 鶴。

【通釋】朝、船を乘り出して、武庫の浦を漕いで行くと、潮干してゐる潟に鶴の聲がしてゐる。

長門浦より船出せし夜、月の光を仰ぎ觀て、作れる歌

で今日も亦あゝして面白さうに狩をしてゐられるなあ、とふと思はず口ずさんだらしい歌である。

【我評】 田舎娘の可憐な姿が髣髴として浮んでくる。素朴な野趣に富んだ歌である。

【我評】 東國から筑紫までの長い道中をしよんぼりと元氣なく下つて行く姿が想像される。

鷹狩のこと。

【通釋】 つむが野に鷹の尾につけた鈴の音が聞える。あれは大方上志太の殿の中の二番目の若様が鷹狩なさるのであらう。

（一七三） 稻つけばかがる吾が手をこよひもか殿のわく子が執りて歎かむ。

【語釋】 ◎稻つけば　籾を臼で舂いて米にすること。　◎かがる　あかがりの切れること。　◎殿のわく子　殿の若子。

【通釋】 今夜も殿の若様がいらつしやつて、稻を舂いてこんなにあかがりの切れてゐる手を執つて御覧になつて、可愛いさうだと仰しやつてお歎きになるだらう。

防人の歌

（一七四） おの妻をひとの里に置きおほほしく見つゝぞ來ぬるこの道のあひだ。

【語釋】 ◎防人。 崎守の義で、東國の壯丁を、三年交替で太宰府に召し、そこから更に邊要の地に遣はして、外敵の防備に備へたものである。　◎人の里に置き　作者は筑紫にゐるので、自分の故鄕に殘して置くことを人の里と云つたのである。　◎おほほしく　おぼつかなく。

【通釋】 わが妻を遠い鄕里に置いて來たので、不安な心でこの長い道中をただぼんやりと見ながら來たことだ。

【批評】 馬の足音をひどく氣にしながら、びくびく橋を渡るときの男のさまが眼前に浮ぶ。

【批評】 序がよく生きてゐる

【批評】 この殿の二男の鷹狩好きなことはもう有名になつてゐるのであらう。それ

通釋 葛飾の早稲田の稲を刈つて、新嘗を營む大事な夜であつても、あのかはいゝ人が來られたなら、外に立たせはしないで、内へお入れするであらう。

（一七〇）足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通はむ。

語釋 ◎駒もが　駒もあつてほしい。「が」は、希望の助詞。◎眞間　葛飾の里の名。◎繼橋　川の眞中に二本の柱を立てゝ、それに横木を結び付け、その横木へ向岸からも此方からも板を架けておく假橋。

通釋 足音をさせないで行く馬があつてほしい。そしたら、それに乘つて、あの眞間の繼橋をそつと渡つて、絶えず妹のところへ通ふのに。

（一七一）筑波嶺のをてもこのもにもりべ据ゑ母は守れども魂ぞあひにける。

語釋 ◎筑波嶺　常陸にある。◎をてもこのも　そこここ。◎もりべ　守部で、獵をする時、獸を待ち伏せるために見張りをする人。即ち、番人。上三句は下の「守る」の序である。◎魂ぞあひにける　心と心とは逢つてしまつた。

通釋 筑波山のあそこゝに番人を置いて、張番させるやうに、母は私を大切に守つてゐるけれども、あの人の心と私の心とはあうて、相思の仲となつてしまつた。

（一七二）つむが野に鈴が音聞こゆかむしだの殿のなかちしとがりすらしも。

語釋 ◎つむが野・かむしだ　共に駿河の地名。◎鈴の音　鷹の尾鈴（ヲスズ）の音。◎殿　國の守・公以下郡領など。◎なかちし　中ち子で。次男。◎とがり　鷹を使つて小鳥を狩ることで、

に燃えてゐる

【批評】夫の歌である。妻の眞心に對して、これ又、妻を愛する深い情があらはれてゐる。

【批評】神聖な祭事をも憚らないところに、いかにも切實な心が見える。

「なめ」は並べで、即ち、鏡だけでは馬の價に足らないから、それに領布を添へて出す意。◎わが背　わが夫。

【通釋】山城へ行く路を、人の夫は皆馬に乘つて行くのに、わが夫だけ一人歩いて行かれるのを見る度毎においとしくて聲を立てゝ泣かれることである。このことを思ふと胸も張り裂ける思ひがする。私が母の形見としていただいて持つてゐるこのよく澄んだ鏡に、蜻蛉の羽のやうな、薄くて美しい領布を添へて持つて行つて馬を買ひなさい、わが夫よ。

反歌

（一六八）馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも吾は二人行かむ。

【語釋】◎妹　妻。　◎よしゑやし　よしまゝよ。

【通釋】しかし馬を買つたならば、わし一人行く時はよいが、二人行く場合に、そなたは歩行で行かねばならぬ。かまふものか、たとひ石を踏んでもわしは二人で歩いて行かう。

巻十四

東歌

（一六九）にほどりの葛飾早稻を饗すともその愛しきを外に立てめやも。

【語釋】◎にほどりの　かづく、の枕詞から同音の葛飾にもかゝる。　◎葛飾　地名。　◎饗す　新饗すの義。その年の新穀を神に供へ、又、家族の者も食する新嘗の祭の夜は、ひどく忌み愼んで、他人を家の中に入れなかつた。　◎愛しき　愛する男。

【鑑評】これは長歌の反歌で、海を越えて遠く旅立つ人に贈つてその無事を祈つた歌と思はれる。言靈の助くると云ふ上代人の特殊な信仰に注意したい。

【鑑評】旅商人などの妻の詠んだものであらう。實に涙ぐましいばかりに、美しい、眞實な心である。一篇全く夫を思ふの情

(一六五) 敷島のやまとの國に人ふたりありと思はば何か歎かむ。

【語釋】◎敷島の　やまとの枕詞。　◎人　愛する人。

【通釋】この世の中に私の愛する人が二人あるものなれば、どうしてこのやうに歎かう。私の思ふ人はあなたより外にはないから、かく深く思ひ歎くのである。

柿本人麿の歌集の歌に曰く

(一六六) 敷島のやまとの國は言靈の助くる國ぞまさきくありこそ。

【語釋】◎言靈　言語に靈があると考へた思想から言つたもの。　◎まさきく　幸。「ま」は美稱の接頭辭。　◎ありこそ　あれかし。「こそ」は願望の助詞。

【通釋】わが日本の國は言靈の助ける國である。自分がこのやうに祈る言葉のやうにどうか幸であつてくれ。

問答

(一六七) つぎねふ　山城路を　人づまの　馬より行くに　おのづまの　歩行より行けば　見るごとに　音のみし泣かゆ　そこ思ふに　心し痛し　たらちねの　母の形見と　吾が持たる　まそみ鏡に　蜻蛉領布　おひなめ持ちて　馬買へわが背。

【語釋】◎つぎねふ　山城の枕詞。　◎人づま　人の夫。　◎馬より　馬で。　◎おのづま　自分の夫。◎そこ　このこと。◎心し　「し」は强意の助詞。　◎たらちねの　母の枕詞。　◎まそみ鏡　よく澄んだ鏡。「ま」は美稱の接頭辭。　◎蜻蛉領布　蜻蛉の羽のやうに、薄くて美しい領布。領布は、貴婦人の正裝に頸から肩にかけて飾りとした布帛。　◎おひなめ持ちて　「おひ」はおひ鐙のこと。

語釋 ◎いで　さあ。◎行きこそ　行けよ。「こそ」は願望の助詞。◎待乳山　紀伊と大和との國境にある。

通釋 さあさあ馬よ、早く行つてくれ。この待乳山を越えて、今か今かと待ち焦れてゐる妻の顔が早く見たい。

巻十三

（一六三）天(あめ)なるや日月の如くわがもへる君が日にけに老ゆらく惜しも。

語釋 ◎天なるや　天にある。「や」は感動の助詞。◎日月の如く　日月を仰ぐやうに。◎日にけに　日々に。「け」は日の意。◎老ゆらく　老いること。

通釋 天にある太陽や月のやうに仰ぎ尊んでゐるわが君が日に日に老い行き給ふのが、惜しいことである。

（一六四）敷島の　やまとの國に　人さはに　滿ちてあれども　藤浪の　思ひまつはり　若草の　思ひつきにし　君が目に　戀ひやあかさむ　長きこの夜を。

語釋 ◎敷島の　やまとの枕詞。◎さは　澤山。◎藤浪の　まつはる、の枕詞。◎若草の　つく、の枕詞。◎君が目に　君が目をと同じい。目と云つても姿のことである。

通釋 日本國中には人は澤山滿ち滿ちてゐるが、特にわが心にまつはりつき、胸に沁みついてゐる慕はしい君のみ姿の戀ひしくて、長いこの夜をこがれあかすことである。

る途中の待乳山のもとを過ぎる時詠んだものであらう。早く歸りたくて、ぢつとしてゐられない心もちがよくあらはれてゐる。

【批評】 長歌の反歌である。「日月の如く」と譬へたのは高貴の人を思はしめる。

【批評】 長歌と云ひながら極めて短いところに却て餘情が深い。

さい、世間をひどく憚るところに、いかにも女らしいところがある。

【批評】二三句は「いぶせくも」の序詞である。而も序詞が中々よく感じをあらはしてゐる。

【批評】女の別れを悲しんで、しばらくでも留めようとして詠んだものである。そのいぢらしさに何となく同情される。

【批評】紀伊に地方官として赴任してゐた人が大和へ歸

（一五九）人言を繁み言痛み我背子を目には見れども逢ふよしもなし。

【語釋】◎人言を繁み　人が盛に噂するので。◎言痛み　煩しいので。◎逢ふ　直接逢つて話をする。

【通釋】世間の人がいろ〳〵と噂したりして、うるさいので、自分の慕ふ人を目には見ても、親しく話しする方法もない。

物に寄せて思を陳ぶ

（一六〇）たらちねの母が飼ふ蠶の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて。

【語釋】◎たらちねの　母の枕詞。◎繭ごもり　繭の中にこもつてゐる。◎いぶせく　心の晴れないこと。

【通釋】母の飼つてゐる蠶が繭の中にこもつてゐるやうに、妹に逢はないで心が晴れずうつとうしいことである。

（一六一）さひのくま檜の隈川に馬とどめ馬に水かへわれよそに見む。

【語釋】◎さひのくま檜の隈川　同じ詞を重ねて詞を緩かにしたのである。檜の隈川は、大和國高市郡にある川。◎水かへ　水を飲ませる。

【通釋】檜の隈川にしばし馬を駐めて水をお飲ませなさい、飽かずしてお別れするあなたのお姿をその間なりとも外ながら見たうございます。

羈旅に思を發す

（一六二）いでわが駒早く行きこそ待乳山待つらむ妹を行きてはや見む。

た一人あるきりである。

(一五六) 逢ひ見ては面かくさるゝものからにつぎて見まくのほしき君かも。

語釋 ◎ものからに　ものではあるが。　◎見まくの　見ることの。

通釋 お目にかゝると恥かしくて、何となく顏を隱したくなるのに、逢はないでゐるとお慕はしくなつて、何時もあの人が見てゐたくてしようがない。

【批評】 初心な少女の眞情がありのまゝに歌はれてゐる。

(一五七) ますらをは友のさわぎに慰もる心もあらむ我ぞ苦しき。

語釋 ◎ますらを　丈夫。男子。　◎慰もる　慰められる。

通釋 男の人は物思ひすると云つても、外に出て友と交つてゐればとかく慰められることもあらうが、女の身は家にばかりゐて、ひとり〳〵思つて苦しむばかりである。

【批評】 苦しさのあまりに出るいかにも女らしい愚痴である。

物に寄せて思を述ぶ

(一五八) 馬の音のとどともすれば松蔭に來でてぞ見つるけだし君かと。

語釋 ◎とども　とどろく音の形容。

通釋 馬の足音のどた〳〵すると、ひよつとすると君が來られたのかと思つて、松の木蔭に人に見つけられぬやうに出て見ることである。

【批評】 いかにも待ち遠ほしい心の落ちつかないさまがよくあらはれてゐる。

巻十二

正に心緒を述ぶ

【批評】 氣の小

【通釋】庭に生ひ茂つてゐる草に村雨が降りそゝいで、こほろぎがしづかに鳴いてゐるのを聞くと、何となく秋の時候になつたことが感ぜられる。

【批評】女の歌である。いかにも優しい心根だ。

霜に寄す

（一三三）はなはだも夜深けてな行き道の邊のゆ笹が上に霜の降る夜を。

【語釋】◎はなはだも　こんなに。　◎な行き　行くな。　◎ゆ笹　繁き笹。「ゆ」は五百（イホ）の約、多い意。

【通釋】道のほとりの繁い笹の上に霜が降つてゐる寒い夜だのに、こんなに夜更けてお歸りなさるなよ。夜が明けてからになさい。

卷十一

正に心緒（おもひ）を述ぶ

（一三四）たらちねの母が手離れかくばかりすべなきことは未だせなくに。

【語釋】◎たらちねの　母の枕詞。　◎すべなきこと　何とも仕方のないこと。

【通釋】母の膝を離れて以來、このやうなやるせない物思ひはまだしたことがない。

【批評】「母が手離れ」と云ふところに、まだあまり世間を知らない可憐な少女を思はしめる。

（一三五）うち日さす宮道を人は滿ち行けどわが思ふ君はただ一人のみ。

【語釋】◎うち日さす　宮の枕詞。　◎宮道　都大路。

【通釋】賑やかな都大路を大宮人は澤山お通りになるけれども、私のお慕ひしてゐる人は、その中にたつ

【批評】女の純眞な愛が極めて素直に歌はれてゐる。

鳥を詠める

（一四九）ほとゝぎす鳴く聲聞くや卯の花の咲き散る岡に葛(くず)引く少女。

（註）◎葛引く　葛の根を取る。根には多量の澱粉を含んでゐる。

（譯）眞白い卯の花の咲いたのが、はら／＼散つてゐる岡に葛根を引いてゐる少女よ、そなたもあのほとゝぎすの聲を聞いてゐるか。

【批評】まるで、美しい繪のやうな場景である。

花を詠める

（一五〇）秋風はすずしくなりぬ馬並(な)めていざ野に行かな萩の花見に。

（註）◎並めて　並べて。

（譯）秋風が涼しく吹き渡るやうになつた。さあ、皆で馬を並べて、野邊に萩の花を見に行かうではないか。

【批評】實に爽快な感じがある。

雁を詠める

（一五一）秋風に大和へ越ゆる雁が音(ね)はいや遠ざかる雲がくりつゝ。

（註）◎いや遠ざかる　だんだん遠くへ行く。

（譯）秋風が吹く中を大和の方へ山を飛び越えて行く馬は、雲の中に隱れて次第に遠くへ行く。

【批評】旅にあつて詠んだものであらう。雁の行く方が故郷だと、なつかしく見送つて立つてゐる作者が想像される。

蟋蟀を詠める

（一五二）庭草に村雨降りてこほろぎの鳴く聲聞けば秋づきにけり。

（註）◎秋づき　秋の時候になる。

【批評】秋の訪れがしみじみと味はれる。

【批評】いかにもゆつたりとした、明るい朗らかな感じがある。

【批評】朧ろな春の月夜のけしきが巧みに詠まれてゐる。

【批評】いかにも平和な、長閑な光景である。

【批評】いかにも泰平の御代のさまが感ぜられる。

〔語釋〕◎冬ごもり　春の枕詞。　◎春さり來らし　春になつたらしい。

〔通釋〕もう一樣に春になつたらしい、山にも野にもあんなに鶯が鳴いてゐる。

月を詠める

（一四六）春されば木のくれ多み夕月夜おぼつかなしも山かげにして。

〔語釋〕◎春されば　春になれば。　◎木のくれ多み　木蔭が多い故に。

〔通釋〕春になると、木の葉が生ひ茂つて、木蔭が多いから、殊に山蔭ではあるしして、夕月の光りが一層ぼんやりしてゐて、まことにたどたどしいことである。

煙を詠める

（一四七）春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ摘みて煮らしも。

〔語釋〕◎うはぎ　よめ菜のこと。

〔通釋〕春日野に煙の立つてゐるのが見える、あれは少女等が野のよめ菜を摘んで煮てゐるのであらう。

野遊

（一四八）もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝに集へる。

〔語釋〕◎もゝしきの　宮の枕詞。　◎大宮人　宮中に仕へてゐる人。　◎いとまあれや　「や」は疑問の助詞。　◎かざし　髪に挿す。

〔通釋〕大宮人達は暇なのであらうか、誰も彼も樂しさうに梅の花を挿頭して、この野邊に集つてあそんでゐる。

天正五年癸酉、遣唐使の舶、難波を立ちて海に入る時、親母の子に贈れる歌

（一四二）旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の鶴群。

【語釋】◎旅人　一行の人々を廣くさしたもの。◎はぐくむ　羽含の義で、覆ひ育てること。◎天の空を飛ぶ。

【通釋】あの遣唐使の一行が旅寝する野に寒い霜が降るならば、空を飛ぶ、鶴の群よ、降りて來て、わが子を羽で覆ひ包んで暖めてやつてくれ。

【批評】これは長歌の反歌である。遠い旅に行くわが子の上を思ふ母親の深い情愛があふれてゐて胸に沁む思ひがする。

卷十

（一四三）ひさかたの天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも。

【語釋】◎ひさかたの　天の枕詞。

【通釋】天の香具山には今日は夕霞がたなびいてゐる、もう春が來たらしい。

【批評】何となく大きい、悠長な、而も長閑な立春の氣分を感ぜしめる。

鳥を詠める

（一四四）梅の花咲ける岡邊に家居ればともしくもあらず鶯の聲。

【語釋】◎家居れば　家居すれば。◎ともし　少い。

【通釋】梅の花の咲いてゐる岡に住んでゐると、鶯が盛に鳴いてまことに樂しい。

【批評】場所と云ひ、時候と云ひ、まことに平和な氣分がある。

（一四五）冬ごもり春さり來らし足引の山にも野にも鶯鳴くも。

緒に暮らさうと思ふなら、この筥を決して開きなさるな。」とくれぐれも固く約束して筥を渡したが、浦島は、住吉に歸つて來て、自分の家を搜したが見えず、里を搜しても見えないので、不思議なことだと、そこで考へるには、元來、自分が家を出て、僅か三年ぐらゐにしかならぬのに、こんなに垣もなく、家もなくなると云ふことがあらうか、と、この筥を開けて見たらきつと元の如く家はあるのであらうと、その筥を少し開いたところが、白雲がその筥の中から出て、常世國の方へたなびいたから、これはしまつたと、走り廻り、聲を上げて叫び、袖をふり、轉げ廻り、地團太踏んで忽ちのうちに正氣を失ひ、あの若かつた肌も皺が寄つた。黑かつた髮も白くなつた。そしてしまひには、息さへも絶えて、後たうとう死んでしまつた。その浦島子の家のあつた所があそこに見える。

反歌

（一四〇）常世べに住むべきものを劍太刀(つるぎたち)しが心からおそやこの君。

【語釋】◎劍太刀　心の枕詞。◎しが　それが。◎おそや　痴鈍。

【通釋】常世の國に永久に住んでゐられる筈のものを、わが心から取り返しのつかぬことをした、實に愚かな人である。

【批評】これが作者の浦島觀である。常世を憧憬する心があらはれてゐる。

石河大夫の任に遷されて京に上る時、播磨娘子(をとめ)の贈れる歌

（一四一）君なくば何ぞ身裝(よそ)はむ櫛笥(くしげ)なる黃楊(つげ)の小櫛も取らむとも思はず。

【語釋】◎裝はむ　飾らう。

【通釋】あなたが此地を去つておしまひになつたならば、何の爲に身を飾りませう、櫛笥の中の黃楊の櫛も手に取らうとは思ひません。

【批評】純眞な情が涙ぐましいばかりに感ぜられる。

やうな傳說は他にも羽衣傳說、かぐや姬傳說等があり、神話學の方面から見ると、仙鄉淹留說話に入るべきもので、支那思想の影響である。

【語釋】◎水江　地名。丹後國竹野郡網野町の附近にある淡水湖の古名で、住江は、その湖濱に沿うた浦の名。◎浦島子　名、「子」は男子の名に添へる。◎たゆたふ　搖れ漂ふ。◎釣りほこり　得意になつて釣る。◎家にも來ずて　自分の家にも歸つて來ないで。◎海界　海のはて。◎わたつみ　海。◎たまさかに　偶然に。◎い漕ぎ　「い」は接頭辭。◎ことなりしかば　事が成就する。◎かき結び　夫婦の契りを結ぶ。◎常世　永久不變の世界。◎內の重　奧深い處。◎妙なる殿　美麗を極めた宮殿。◎たづさはり　相共に手を執り合つて。◎かたくな人　愚人　浦島のこと。◎わぎも子　吾妹子で、海神の少女。◎告りて　云ひ聞かす。◎しましく　しばらく。◎明日のごと　直ちに。◎常世邊　「邊」は接尾辭。◎篋　櫛笥で、化粧道具を入れる箱であるが、こゝはただ小筥のこと。◎ゆめ　決して。◎そこらく　くれぐれ。◎見かねて　見ることが出來ないで。◎家ゆ　家を。◎家らせめや　家のなくなることがあらうか、ありはしない。◎見てば　見たならば。◎玉篋　「玉」は美稱。◎こいまろび　ころげまはる。◎足摺りし　地團太踏む。◎ゆなゆなは　はて〳〵は。◎家どころ見ゆ　家の在つた處が見える。網野の銚子山の東麓に浦島の家の跡と傳へてゐる處がある。勿論傳說地である。

【通釋】春の日の霞んでゐる時に、住江の岸に出て、釣舟が波にゆら〳〵と漂つてゐるのを見ると、古の浦島のことが思ひ出される、水の江の浦島子が鰹釣りや鯛釣りに、あまり獲物の多いのに得意になつて、七日間も家に歸つて來ないで、海の果てをずんずん漕いで行くと、偶然、海神の少女に漕ぎ逢ひ、互に語り合つて事が成就し、夫婦の約を結んで、その少女の常世國に行つて、海神の宮の大奧の美麗を極めた御殿に連れだつて二人入り、老いることもなく、死ぬることもなく、永遠に住んでゐられたものを、世にも愚なこの浦島は、わが妻に語つて言ふには、「一寸家に歸つて、父母に事情を話して、直ぐ又歸つて來よう。」と云つたところが、妻の言ふには、「この常世國に又歸つて來て、今のやうに一

【通釋】もう夜も更けて、夜中頃となつたのであらう、雁の鳴き渡る空に月の高く澄んでゐるのが見える。

水江浦島子を詠める歌一首并に短歌

（一三九）春の日の　霞める時に　住吉の　岸に出でゐて　釣船の　たゆたふ見れば　いにしへの　ことぞ思ほゆる　水の江の　浦島の子が　堅魚釣り　鯛釣りほこり　七日まで　家にも來ずて　海界を　過ぎて漕ぎ行くに　わたつみの　神の少女に　たまさかに　い漕ぎ向ひ　相語らひ　ことなりしかば　かき結び　常世に至り　わたつみの　神の宮の　內の重の妙なる殿に　たづさはり　二人入りゐて　老いもせず　死にもせずして　とこしへに　ありけるものを　世の中の　かたくな人の　わぎも子に　告りて語らく　しましくは　家に歸りて　父母に　ことをも告らひ　明日のごと　われは來なむと　言ひければ　妹が言へらく　常世邊に　また還り來て　今のごと　あはむとならば　この篋　開くなゆめと　そこらくに　堅めしことを　住吉に　歸り來りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　あやしと　そこに思はく　家ゆ出でて　三年のほどに　垣もなく　家うせめやと　この筥を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと　玉篋　少し開くに　白雲の箱より出でて　常世邊に　たなびきぬれば　立ち走り　叫び袖振り　こいまろび　足摺りしつゝ　忽ちに　心消うせぬ　若かりし　肌も皺みぬ　黑かりし　髮も白けぬ　ゆなゆなは　息さへ絶えて　後つひに　命死にける　水の江の　浦島の子が　家どころ見ゆ。

【批評】これは浦島の傳說を歌つた長篇の敍事詩である。靜かに誦んでゐると、何となく神秘的な古傳說の雰圍氣の中に包んでしまはれる春の日の霞んだ住吉の海上に漂ふ釣船の光景を描いて自然と浦島の傳說に筆を運び、最後に、浦島の家處見ゆと結んだ、一篇の構想はまことに巧妙である。これに類する

の情趣が漂つてする。

【批評】初秋の清冷な氣分がよくあらはれてゐる。

【批評】留守居する妻の歌である。旅にある夫の身を案ずる優しい心が十分あらはれてゐる。

【批評】靜寂な深夜の情景がしみじみと感ぜられる。

【語釋】◎尾花　薄の穗。　◎朝顏　今日の牽牛花ではなくして、桔梗のことだと云ふ說がある。

【通釋】秋の野の花としては、萩の花・尾花・葛の花・撫子・女郎花・それから藤袴と朝顏の花が美しい。

安貴王の歌

（一三六）秋立ちて幾日もあらねばこの寢ぬるあさけの風は袂寒しも。

【語釋】◎幾日もあらねば　幾日も經たないのに。　◎この寢ぬる　寢た夜のこの明方。

【通釋】秋になつてからまだ幾日も經たないのに、はやこの夜の明け方の風が袂に寒く當ることである。

巻九

崗本宮御宇天皇（舒明）の紀伊國に幸せる時の歌

（一三七）朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりや君が山道越ゆらむ。

【通釋】朝霧のためにびつしよりと濡れた、冷た旅衣を干すこともなく、只一人夫は山道を越えてゐられるであらう。

弓削皇子に獻れる歌

（一三八）さ夜中と夜は更けぬらし雁音の聞ゆる空に月渡る見ゆ。

【語釋】◎弓削皇子　天武帝の皇子。　◎さ夜中と　夜中にと。「さ」は接頭辭。

はれてゐる。拾遺集の「逢坂の關の淸水に影見えて今や牽くらむ望月の駒」は、この歌から換骨奪胎したものである。

【批評】春早の氣分がよく現れてゐる。

【批評】いかにもしみじみとしたなつかしい歌である。

【批評】表面ただ名詞の羅列に過ぎないやうであるが、そこにおのづから、秋の野

語釋 ◎かはづ　河鹿である。◎甘南備川　大和生駒郡神南備山の麓を流れる川。

通釋 今頃は大方、あの河鹿の鳴く神南備川の水に、美しい影をうつして、山吹の花が咲いてゐることだらう。

大伴宿禰家持の鶯の歌

（一三三）うちきらし雪は降りつゝしかすがに吾家（わぎへ）の園に鶯鳴くも。

語釋 ◎うちきらし　うち霧らしで、空を霞ませる意。「うち」は、接頭辭。◎しかすがに　しかしながら。◎わぎへ　わがいへ、の約。

通釋 空を曇らせて雪はしきりに降つてゐるけれども、しかしわが家の園には、もう鶯が來て鳴いてゐる。

崗本天皇（をかもとのすめらみこと）（舒明）の御製の歌

（一三四）夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜（こよひ）は鳴かずいねにけらしも。

語釋 ◎夕されば　夕べになれば。◎小倉の山　大和龍田にある。◎いねにけらしも　寢たらしい。

通釋 夕方になるときつと小倉山で鳴く鹿が、今夜鳴かないのはもう寢たのであらう。

山上憶良、春の野の花を詠める歌

（一三五）萩が花、尾花葛花（くず）撫子（なでしこ）の花女郎花また藤袴朝顏の花。

卷八

志貴皇子の懽(よろこび)の歌

（一三〇）石ばしる垂水(たるみ)の上のさ蕨の萌え出る春になりにけるかも。

【語釋】◎志貴皇子　天智帝の皇子。◎石ばしる　垂水の枕詞。◎垂水　垂れ落ちる水、即ち瀧。◎上　ほとり。◎さ蕨。「さ」は接頭辭。◎萌え出る　芽を出す。

【通釋】瀧のほとりの蕨の萌え出る暖い春になつたことである。

【批評】初春の氣分がよくあらはれてゐる

山部宿禰赤人の歌

（一三一）春の野に菫(すみれ)摘みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢にける。

【語釋】◎なつかしみ。なつかしい故に。

【通釋】春の野に菫を摘みに來たのであるが、野邊の景色のなつかしさに歸ることも忘れて、一夜宿つたことである。

【批評】自然を愛する心が遺憾なく發揮されてゐる。

厚見(あつみ)王の歌

（一三二）かはづ鳴く甘南備(かむなび)河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花。

【批評】これは、王が故郷の神甘備川の景色を思ひ出して詠んだもので、いかにも、平和な、淸爽な情趣があら

（一三六）君がため手力疲れ織りたる衣ぞ春さらば如何なる色に摺りてばよけむ。

【語釋】◎衣　織物。◎春さらば　春になつたら。◎摺りてば　摺つたならば。花の色に摺りつけること。◎よけむ　よからう。

【通釋】君に着せる爲にと、手の疲れるまで一心になつて織つたこの衣を、春が來たならば、どう云ふ色に染めつけたらよいでせうか。

【説評】いかにも女らしい可憐な情があらはれてゐる。

（一三七）この岡に草刈るわらはしかな刈りそねありつゝも君が來まさむ御秣にせむ。

【語釋】◎わらは　子供。◎しかな刈りそね　そんなに刈り取つて下さるな。「そ」は敬語の助動詞。「ね」は希望の助詞。◎ありつゝも　そのまゝにしておいて。◎御秣　馬の食べる料の草。

【通釋】この岡に來て草を刈る子供よ。そんなにすつかり刈り取らないで下さいよ、そのまゝに置いて、私の待つてゐる君が召してお越しになる馬の秣にしたいから。

【説評】田舍の女らしい素朴な心遣ひがいかにも優しい感じがする。

譬喩歌（玉に寄す）

（一三八）わたの底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずはやまじ。

【語釋】◎わた　海。◎しづく　沈む。

【通釋】海底に沈んでゐる白玉は、たとひ風が吹いて海は荒れても取らずにはおかない。

【説評】周圍の事情に妨げられてゐる女を水中の玉に譬へたものである熱情がよくあらはれてゐる。

挽歌

（一三九）さきはひの如何なる人か黒髪の白くなるまで妹が聲を聞く。

【語釋】◎さきはひ　幸。◎妹　こゝは妻のこと。

【通釋】どう云ふ幸福な人であらうか、あんなに黒髪が白くなるまでも、妻と仲よささうに語り合つて幸福な日を送つてゐる人は。

【説評】早く愛妻を失つた人の詠んだ歌であらう。眞情がよくあらはれてゐて、何となく心を動かされる。

(一三二) さ夜更けて夜中の方におぼほしく呼びし舟人泊てにけむかも。

◎夜中　近江國にある地名。　◎おぼほしく　おぼつかなく。　◎泊つ　とまる。

夜更けて、夜中の方に當つておぼつかなく舟人の呼ぶ聲が聞えてゐたが、もはやその聲も止んでしまつたのは、もうあの舟人は何處かへ泊つたのであらう。

【批評】何となくしんみりしたはかない感じがするやうな歌だ。

(一三三) 風早の三穗の浦廻を漕ぐ舟の船人さわぐ浪立つらしも。

◎風早の三穗の浦　紀伊國日高郡三尾浦の古名。

風の吹き荒れる三穗浦の海を漕いでゐる船頭がしきりに騷いでゐる。どうやら浪が荒れて來たらしい。

【批評】地名の「風早」に風の早い意味もこもつてゐるで情景を添へてゐる。

(一三四) 波高しいかに梶取水鳥の浮寢やすべきなほや漕ぐべき。

◎梶取　船頭。　◎水鳥の　浮寢の枕詞。　◎浮寢　水上に船の中に寢ること。

波が高い。どうだ船頭よ、今夜はこゝに舟の中に寢たがよからうか、それとも波を凌いでもつと漕いで行つたがよからうか、どうしたものであらう。

【批評】航海中に船頭に言ひかけたのである心細さうなさまがよくあらはれてゐる。

時に臨みて

(一三五) あかときと夜烏鳴けどこの山上の木末の上は未だ靜けし。

◎あかとき　曉。

夜明を告げる夜烏の聲は鳴いてゐるが、しかし、この岡の梢に寢てゐる鳥はまだ鳴きもせず靜かである。

【批評】曉の靜寂さがいかにもこゝろよい

旋頭歌

通釋 廣々とした天の海に、雲の波が立つてゐて、月の船が星の林の中へ漕ぎ隱れるのが見える。

雲を詠める

（一一九） あしびきの山河の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る。

右の一首柿本朝臣人麿の歌集に出づ

語釋 ◎あしびきの　山の枕詞。◎鳴るなべに　鳴るにつれて。◎弓月が嶽　三輪山の北にある卷向山の峰である。

通釋 山河の瀬の音がはげしく鳴り出したかと思ふと、月弓が嶽に雲が一面に立ち渡つて今にも雨がこちらにもやつて來さうな模樣である。

山背にて作れる

（一二〇） 宇治河を船渡せをと呼ばへども聞えざるらし楫の音もせず。

語釋 ◎渡せを　「を」は感動の助詞「よ」に同じい。◎呼ばへ　呼ぶ。「へ」は繼續をあらはす助動詞。

通釋 宇治川の邊に立つて、「おうい、渡守よ、渡してくれ」と大聲で呼んでも、一向漕いで來る楫の音もしないのは、渡守に聞えないと見える。

羈旅にて作れる

（一二一） 家さかり旅にしあれば秋風の寒き夕べに雁鳴き渡る。

語釋 ◎さかり　離れ。

通釋 家を遠く離れて旅にゐると、秋風の寒く吹く夕方に、雁が鳴いて通る。

【批評】—山雨の今にもやつて來さうな前の情景が力強くあらはされてゐる。山河の瀬のはげしく鳴る音、黒雲のむく〱と群るさま、實に壓倒されるやうな自然の威力を感ずる。

【批評】呼ぶ言葉を中に挿んだ表現がいゝ。

【批評】—言も淋しいとも悲しいとも言はないで、自づから旅の哀愁、秋の夕暮のもの悲しさが身に泌むやうである。

ちはへて　限りもなく。どこまでも。◎里なみ敷けば　人家を並べ構へる。◎天地の云々　天地のあらん限り。◎大宮すらを　大宮であるのを。◎新世の　盛な當代。◎ひきのまにまに　ひき連れて行き給ふにつれて。◎春花の　遷るの枕詞。◎遷ろひ變り　新京へ遷つて行く。◎むら鳥の　朝立つの枕詞。◎朝立ち　ただ立つこと。◎さす竹の　大宮の枕詞。◎踏みならし　踏み平らす。

【通釋】わが天皇の治め給ふ日本の國は、皇祖の神の御代から、お治めになつてゐる國であるから、お生れあそばされる代々の御子がつぎつぎに天下をお治めにならうとて、幾千萬年の後までかけて、都と定められた奈良の都は、春になると春日の三笠山の麓の野邊に咲いた櫻の枝に隱れて郭公鳥がしきりに鳴き、秋になると、生駒山の飛火が岡に萩の枝を押し靡け散らす牡鹿の妻を呼ぶ聲が響き渡り、山を見ると山も見ておもしろく、里を見ると、里も住みよい。多くの朝臣が限りもなく人家を並べ構へるので、天地のある限り永久に、榮え行くであらうと思つてゐた大宮所であるのに、又、あれほど頼みにしてゐた平城の都であるのに、盛な當代のこととて、天皇の引き連れて行かせられ給ふまゝに、皆新京に移つて行くので、今まで大宮人が踏み平らした都大路は馬も通らず、人も往來しないので、荒れ果てゝしまつたことである。

【批評】響きが面白く、景色としても壮大の趣がある。

巻七

天を詠める

（一一八）天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隱る見ゆ。

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ

【語釋】◎星の林　星の群。

見ては當時の人しみじみ人生の常なきを感じたことであらう。

【批評】 當代のことを叙べるのに、皇祖の御代から書き起したところ、如何にも悠遠な感がある。「馬も行かず人も往かねば」は、もとより誇張であらうが、荒れたことをあらはすに却て効果あらしめてゐる。

寧樂の故郷を悲しみて作れる歌一首並に短歌

（一二七） やすみしし　わが大君の　たかしかす　大和の國は　すめろぎの　神の御代より　敷きませる　國にしあれば　生（あ）れまさむ　御子のつぎつぎ　天の下　知ろしめさむと　八百よろづ　千年をかねて　定めけむ　平城（なら）の京は　かぎろひの　春にしなれば　春日山　御笠の野邊に　さくら花　このくれがくり　かほ鳥は　まなくしば鳴き　露霜の　秋さりくれば　射駒（いこま）山　とぶひが岡に　萩の枝（え）を　しがらみ散らし　さ牡鹿（をしか）は　妻呼びとよめ　山見れば　山も見がほし　里見れば　里も住みよし　もののふの　八十とものをの　うちはへて　里なみ敷けば　天地の　寄りあひの極み　よろづ世に　榮え行かむと　思ひにし　大宮すらを　たのめりし　寧樂の都を　新世（あらたよ）の　事にしあれば　大君の　ひきのまにまに　春花の　遷ろひ變り　むら鳥の　朝立ち行けば　さすたけの　大宮人の　踏みならし　通ひし道は　馬も行かず　人も行かねば　荒れにけるかも。

【語釋】 ◎たかしかす　治め給ふ。◎大和の國　日本の國。◎敷きませる　治め給へる。◎生れまさむ　生れ給はむ。◎八百よろづ千年をかねて　永遠の後をかけて。◎かぎろひの　春の枕詞。◎このくれがくり　木蔭に隱れて。◎かほ鳥　郭公鳥のこと。◎露霜の　秋の枕詞。◎射駒山　今は生駒山と書く。◎とぶひが岡　烽火を擧げる山のこと。その位置に就いては諸說があつて一定しない。◎しがらみ　柴や竹などを押し撓めて搦ませること。◎さ牡鹿　「さ」は接頭辭。◎とよみ　響かせる。　◎見がほし　見ておもしろい。◎もののふの　八十とものを、の枕詞。◎八十とものを　多くの朝臣。　◎う

もつてゐる。自分を白珠に譬へたのがいかにも高僧らしい。「知る」と云ふ語を殆ど各句に用ゐたのが一層注意される。

【批評】松吹く風の音に年の久しさを感ずるところに妙趣がある。

【批評】作者は未詳であるが、かつて、「咲く花のにほふが如く今盛りなり」と歌はれた奈良の京の荒墟を

災に焼失した。　◎白珠　自分を譬へたもの。　◎知らえず　知られず。「え」は奈良時代に專ら用ゐた受身の助動詞。

【通釋】白珠の如き自分の立派な才能は誰こそ知つてくれる者もない。しかし人は知らなくてもよい、自分さへ知つてゐれば、人は知つてくれなくてもかまはない。

十六年（天平）甲申春正月十一日活道岡（いくぢのをか）に登り、一株の松の下に集（つど）ひて飲（うたげ）せる歌

（一一五）一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の澄めるは年深みかも。

右一首市原王作

【語釋】◎活道岡　山城相樂郡西和束村大字白栖の東山にある山。　◎一つ松　一本松。　◎年深み　年が久しく經つてゐる故。

【通釋】この一本松は、一體幾代を經たのであらう。梢を吹く風の澄んで聞えるのは、年を久しく經てゐる故であらうか。

寧樂京の荒墟を傷み惜しみて作れる歌

（一一六）世の中を常無きものと今ぞ知る平城（なら）の京師（みやこ）のうつろふ見れば。

【語釋】◎寧樂京の荒墟　天平十二年、聖武天皇が都を山城の恭仁（クニ）京に移された後の事である。◎うつろふ　變る意であるが、こゝは荒れ行く意に轉じ用ゐた。

【通釋】世の中のものは皆無常であると云ふことを、今明かに思ひ知られた、あの盛であつた奈良の京がだん〳〵荒れて行くのを眼の前に見て。

代はわが文化史上最も光彩ある時代であるかゝる聖代を謳歌したものとして絶好の作である。

【批評】橘は橘の姓を意味されたことは申すまでもない。「さへ」が三度重ねてあるのが、強く響く誇りが名詞で止めてあるのも強い。

【批評】旋頭歌である。何時の世でもかうした不遇の嘆はある。慨歎の聲の中に又強い自信がこ

（二一二）御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば。

◎御民われ　天皇の臣たる我。　◎生けるしるし　生きてゐる甲斐。　◎天地　天下と云ふこと。　◎逢へらく　逢へる事。

天皇の臣下たる自分は、この天下の榮えてゐる御代に生れあつたことを思ふと、まことに生きてゐる甲斐のあることとである。

冬十一月（天平八年）、左大臣葛城王等に、姓橘氏を賜へる時、

御製の歌

（二一三）橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹。

◎御製　聖武天皇である。　◎葛城王　橘諸兄のこと。　橘の姓は王の母である三千代が賜はつたものである。　三千代は美奴王に嫁して、葛城王と佐爲王とを生み、美奴王の薨後、藤原不比等の後妻となつて、光明皇后をお生みした。　◎いや　いよ／＼。　◎常葉　常磐と同じで永久不變の意。

橘はその實も、その花も、その葉も衰へることなく、その枝に霜が降つても、とこしへにいよ／＼榮えるめでたい樹である。

十年（天平）戊寅、元興寺の僧の自ら嘆く歌

（二一四）白珠は　人に知らえず　知らずともよし　知らずとも　われし知れらば　知らずともよし。

◎元興寺　法興寺の別名。　平城七大寺の一で、崇峻天皇の元年に、厩戸皇子が馬子と共に高市郡飛鳥の地に創建せられたものであるが、養老二年に奈良の猿澤池の南に移されたが、安政六年の火

途に上る將軍をおくるに如何にもふさはしい作である。

【批評】丈夫を勵まし給ふ大御心にはさぞかし感激したことであらうと思はれる。

【批評】日本男子の意氣見るべきである。

【批評】天平時

（一〇九）千萬（ちよろづ）の軍（いくさ）なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男（をのこ）とぞ思ふ。

【語釋】◎節度使　奈良朝の時、一方面の軍事を總轄した職名。◎軍　軍勢。◎言擧せず　言葉に擧げてとやかく云ひ立てない。◎取りて　殺す。

【通釋】たとへ、千萬の敵兵が襲うて來ても、とやかくさわぎ立てることなく、容易に討ち平げて歸つて來るべき丈夫だと頼もしく思ふ。

反歌

（一一〇）ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行くな丈夫（ますらを）の伴（とも）。

【語釋】◎行くとふ道ぞ　行くと云ふ道ぞ、の約。「道」は任務のこと。◎おほろかに　尋常に。並大抵に。◎丈夫の伴　「伴」は、ともがら。同類。

【通釋】大丈夫たるものゝ任ぜられて行く重い任務であるぞ、並大抵の旅と思つて行くな、わが丈夫の輩よ。

山上臣憶良、痾に沈める時の歌

（一一一）をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして。

【語釋】◎をのこやも　「や」は反語の助詞、「も」は感動の助詞。◎空しかる　何のなすこともなくいたづらに。

【通釋】苟も男子たるものにして、萬代までも人の語り傳へるやうな立派な名を立てもしないで、空しく死んでなるものか。

六年（天平）甲戌、海犬養（あまの）宿禰岡麿、詔に應ずる歌

神龜元年甲子冬十月五日、紀伊國に幸せる時、山部宿禰赤人の作れる歌

（一〇六）和歌の浦に潮滿ち來れば潟をなみ葦邊をさして鶴（たづ）鳴き渡る。

【語釋】◎神龜元年　聖武帝の御代。◎潟を無み　干潟がない故に。

【通釋】和歌の浦に潮が滿ちて來ると、今まで下りて遊んでゐた干潟がなくなつたので葦の生えてゐるあたりをさして鶴が鳴いて行く。

山邊宿禰赤人の作れる歌

（一〇七）み吉野の象山（きさやま）のまの木末（ぬれ）にはここだも騷ぐ鳥の聲かも。

【語釋】◎み吉野「み」は美稱の接頭辭。◎象山　吉野の離宮に近い象の小川と云ふ溪流に沿うてゐる山。◎木末　梢。◎ここだ　多く。

【通釋】み吉野の象山の間の梢には、多くの鳥が鳴き騷いでゐることだ。

（一〇八）ぬば玉の夜の更け行けばひさぎ生ふる淸き河原に千鳥しば鳴く。

【語釋】◎ぬば玉の　夜の枕詞。◎ひさ木　楸。アカメガシハ・カカガシハ・アカメギリ等と呼ばれる。◎しば鳴く　しばしば鳴く。

【通釋】夜が次第に更けて行くと、楸の生えてゐる淸い川原に、千鳥がしきりに鳴く。

四年壬申、藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるる時、高橋連蟲麿の作れる歌

【批評】實に雄大淸爽な光景である。かゝる光景をよく三十一字の中に收め得た赤人の妙技は類稀である。

【批評】これは次の歌と共に長歌の反歌である。淸流のほとりの幽邃な山の梢の鳥の聲「ここだも騷ぐ」と云つて、却て靜寂の感じを深からしめてゐる。

【批評】知らず知らず心がひき入れられさうなもの靜かな澄み渡つた詩興である。

【批評】遠征の

ころにはあり餘るほどあり、ほしい所には少しもない、人生はとかくかうしたものだ。

【批評】これは憶良の長歌の反歌である。幼兒を死なした親の心には子供がとぼとぼと冥土の道を行つてゐる哀れな姿が見えるやうでもあらう。

【批評】これは長歌の反歌の二首の中の一首である。美しい深山の水流の眺めが平明に歌はれてゐる。

通釋　金持の家の子供等の着物はあり餘るほどでありながら、著る身體が澤山ないので、むざむざと腐らし棄てゝしまふであらう多くの絹や綿など、せめてその一枚でもほしいものだ。

男子(をのこ)名は古日(ふるひ)を戀ふる歌

(一〇四)　若ければ道行き知らじまひはせむしたべの使負ひて通らせ。

語釋　◎男子古日を戀ふる　憶良の男の子の古日の死んだ後、これを慕つて作つた歌である。◎まひはせむ　謝禮はしよう。◎したべの使　冥土の使。◎通らせ　通らして下さい。「せ」は敬語の助動詞。

通釋　この子はまだ幼いから冥土の道は知るまい。お禮はしませうから、冥土の使よ、この子を負つて通らしてやつて下さい。

巻　六

養老七年癸亥夏五月、芳野離宮に幸せる時、笠朝臣金村の作れる歌

(一〇五)　山高み白木綿花(しらゆふばな)に落ちたぎつ瀧(たぎ)の河内は見れど飽かぬかも。

語釋　◎養老七年　元正帝の御代。◎高み　高い故に。◎白木綿花　木綿で作つた白い花。◎たぎつ　たぎる。◎瀧　瀧の地。◎河内　川のめぐつてゐる處。

通釋　山が高いので、木綿を以て作つた白い花のやうに落ちたぎる瀧の河内の景色は、いつまで見ても飽きないほど面白いことである。

ふ　灌ぐと云ふ、の約。◎うは荷　上荷。◎打つ　添へる。◎老いにてある　老いてしまつてゐる。◎晝はも「も」は感動の助詞。◎息づき　溜息つく。嘆息する。◎憂ひさまよひ　歎きうめく。◎ことごとは　かくの如くならば。◎死なな　死にたい。下の「な」は希望の助詞。◎さばへなす　騒ぐの枕詞。◎うつてては　うち捨てては。◎死にも知らず　死んでも死ねない。◎見つつあれば　子供をである。◎ねのみし泣かゆ　ただ泣くばかりである。

〔通釋〕一生の間は平かに安かにありたい、何事もなく、惡いこともなく暮したい、と思ふのを、世の中のなさけなく、辛いことは、恰も非常に痛い瘡に辛い鹽をふりかけるやうに、又、たださへ重い馬の荷に、まだその上、上荷を添へると云ふやうに、年老いてしまつてゐる自分の身體の上に、病まで加へてゐるから、晝は嘆き暮らし、夜は一晩中溜息ついて夜を明かし、このやうに、長い年月の間、病氣し續けてゐるので、年月が經つに隨つて、益々憂ひうめき、こんな事ならいつそ、死にたいと思ふけれども、騒ぐ子供をうち棄てゝは死んでも死にきることが出來ない。子供を見てゐると、心が燃えるやうに苦しい。あれやこれと思ひ煩らうて、ただ泣くばかりである。

（一〇二）すべもなく苦しくあれば出で走りいななと思へど子らにさやりぬ。

〔語釋〕◎すべもなく　何とすべき方法もなく。◎いなな　去つてしまひたい。◎さやりぬ　妨げられる。

〔通釋〕何としようもなく苦しいから、家を出奔して、何處かへ行つてしまふと思ふけれども、子供等に妨げられて、それも出來ぬ。

（一〇三）富人（とみびと）の家の子どもの著る身なみくたし棄つらむ絹綿らはも。

〔語釋〕◎富人　金持。◎著る身なみ　著る身體がないので。◎くたし　腐らし。◎絹綿らはも「は」「も」共に感動の助詞である。

【批評】さもしい心だと笑つてはいけない。不要のと

いものであらうか。

反歌

（一〇〇）世の中をうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。

山上憶良頓首謹上

【語釋】◎うし 憂し。辛い。◎やさし 恥しい。

【通釋】かうして世を渡るのは、辛くもあり、又恥しくもあるが、さうかと云つて翅のある鳥でもないから飛び去ることも出來ない。

老身重病年を經て辛苦す、及び兒等を思ふ歌

（一〇一）たまきはる うちの限りは 平けく 安くもあらむを 事もなく ももなくあらむを 世の中の うけくつらけく いとのきて 痛き瘡(きず)には 鹹鹽(からしほ)を 灌(そそ)ぐちふが如く ますますも 重き馬荷に うは荷打つと いふことのごと 老いにてある 我身の上に 病をと 加へてあれば 晝はも 歎かひくらし 夜はも 息づきあかし 年長く 病みし渡れば 月重ね 憂ひさまよひ ことごとは 死ななと思へど さばへなす 騒ぐ子どもを うつてては 死にも知らず 見つゝあれば 心はもえぬ かにかくに 思ひわづらひ ねのみし泣かゆ。

【語釋】◎たまきはる うちの枕詞。◎うちの限り 一年の間。命のある限り。◎事もなく 何事もなく。◎もなく 惡いことなく。◎うけく 憂い。◎いとのきて 大變。非常。◎鹹鹽 辛い鹽。◎灌ぐち

【批評】飛び立ちかねつ鳥にしあらねば、とは實に悲痛な聲である。

【批評】やはり憶良の歌で言々句々苦しみ惱める魂のうめき聲である老年の上に病氣を嘆きながら、又子供等の上を案じ煩うて、死ぬにも死ねぬとは實に人生最大の悲慘である。

して同情の涙を注いだのである。

のに。◎あれもなれるを　自分も生れて來たのを。◎海松　海藻の一種。◎わわけさがれる　破れさがつてゐる。◎かがふ　襤褸のこと。◎伏庵　伏小屋。◎まげ庵　傾いた小屋。◎眞土　土べた。◎あと　足の方。◎憂ひさまよひ　嘆き呻吟する。◎こしき　甑。蒸籠のこと。◎巣かきて　巣を作つて。◎ぬえ鳥の　のどよひの枕詞。◎のどよひ　うめく。◎いとのきて　甚しく。◎楚　笞。罪人を打つ刑杖。◎里長　村長のこと。◎ねやど　寢處。◎來立ち呼ばひぬ　租税を催促に來て、大聲で怒鳴りつけるのである。◎すべなき　仕方のない。◎世の中の道　渡世の道。

通釋　風の吹くのに雨も一緒に降り、雨の中を雪も降る夜は、仕方のないほど寒いから、堅鹽を少しづゝ嚙り、糟湯酒を啜りながら、咳をし、鼻のつまつたのを鳴らして、僅かばかりの髯を撫でながら、自分ほど偉いものはあるまいと誇つてはゐるが、何しろ寒さに堪へ難いから、麻の蒲團を引つ被り、布の袖無しをありたけ出して重ね着てもまだまだ寒い夜であるのに、自分よりももつと貧しい人の父母は、さぞかし飢ゑもし寒くもあらう。その妻や子は暖を求め、食を乞うて泣くことであらう。さう云ふ折にはどのやうにして世を渡つてゐるか。

天地は廣いと云つても、自分の爲には狹くなつたのか。太陽や月は明かであると云つても、自分の爲にはお照りにならぬのか。このやうな苦しみをするのは世間の人皆であるのか、それとも自分だけであるのか。稀に人界に生を受けて、人並にかうして生れて來たのを、何の因果か、綿もない布の袖無の海松のやうに破れさがつてゐる襤褸を肩にひつ懸けて、低い、而も傾いた小屋の中で、土べたに藁を解いて敷き、父母は枕元に、妻子は足の方に自分を取り圍んで寢て、歎き悲しみ、竈も燒きつけず、甑も長いこと使はないものだから、蜘蛛が巣を作つてをり、飯を炊くことも忘れて、泣きうめいてゐるところへ、「極めて短いものを更に端を切る」と云ふ諺のやうに、笞を持つた村長が寢處の近くまでやつて來て、租税の催促を大聲で呼び立てるのである。一體、世渡りと云ふものはかうもしかたのな

づくかうした心細い淋しい氣もしたであらう。

【批評】當時の下層社會の悲慘な生活がまことに鮮かにあらはれてゐる作者の憶良自身も貧しかつた。自分の貧しいにつけても、自分より一層貧しい者の爲に同情せずにはゐられなかつたであらう。前半には作者自らの貧窮を叙し、後半には自分よりも一層貧しい者の生活狀態を叙

か汝が世は渡る。
天地(あめつち)は　廣しといへど　わがためは　狹(さは)くやなりぬる　日月は　あかしといへど　あがためは　照りやたまはぬ　人皆か　吾のみやしかる　わくらばに　人とはあるを　人並にあれもなれるを　綿もなき　布かた衣の　海松(みる)のごと　わゝけさがれる　かゞふのみ　肩に打ち懸け　伏庵(ふせいほ)の　まげ庵のうちに　直土(ひたつち)に　藁解き敷きて　父母は　枕のかたに　妻子どもは　あとの方に　圍(かく)みゐて　憂ひさまよひ　かまどには　煙ふき立てず　こしきには　蜘蛛(くも)の巣かきて　飯(いひ)かしぐ　ことも忘れて　ぬえ鳥の　のどよひゐるに　いとのきて短きものを　端(はし)切ると　言へるが如く　楚取(しもと)る　里長(さとをさ)が聲は　ねやどまで　來立ち呼ばひぬ　かくばかり　すべなきものか　世の中の道。

【語釋】◎貧窮問答　貧困に苦しんでゐる下層社會のさまを問答體に詠んだもので、前半が問、後半が答である。◎風雜り雨降る夜　吹き降りの夜。◎雨雜り雪降る夜　霙の降る夜。◎すべもなく　寒さを防ぐ方法もない。◎堅鹽　固まつた下等の鹽。◎取りつゞしろひ　少しづゝ食べる。◎糟湯酒　酒の糟を湯で煮たもの。◎うちすすろひ　啜ること。◎しはぶかひ　咳をすること。◎鼻びしびしに　鼻を鳴らす音。◎しかとあらぬ　あるかなきかの。　◎吾をおきて人はあらじ　自分よりえらい者はあるまい。◎麻ぶすま　麻の粗末な蒲團。◎かがふる　被る。◎布かた衣　布製の袖無し羽織。◎ありのことごと　ありたけ全部。◎着そへ　着襲ふ義で、重ね著る。◎飢ゑ寒からむ　飢ゑ且つ寒からう。◎乞ひて　食と暖とを求めて。◎わくらばに　たま／＼。◎人とはあるを　人界に生を受けた

傳説であつて、宣化天皇の御代に、大伴狹手比古が新羅を討ちに向ふ時、妻の松浦佐用姫が名殘りを惜しんで山の上から領布を振つたと云ふのである、さてこの歌の作者に就いては、旅人だとも憶良だとも云はれてゐるが、とにかく、かうした傳説は、この當時の人々に感動を與へたものであらう。

【總評】國司の任期は四年であるけれども、何かの都合で一年延びたのであらう。京から遙に筑紫まで下つて五年間も過ごせばつく

【語釋】◎遠つ人　待つの枕詞であるが、こゝは松浦佐用姫に冠してある。◎松浦佐用姫　大伴狹手彦の妻。◎つまごひに　夫を慕うて。◎領布　古昔、貴婦人の正装に頸から肩に掛けて飾りとした布帛。◎負へる山の名　領布麾嶺のことで、今は鏡山と云つて、肥前唐津の東一里にある。

【通釋】この領布麾嶺と云ふ名は、松浦佐用姫が夫を慕つて、領布を振つたと云ふことからついた山の名である。

聊私懷を布ぶる歌

（九八）あまざかる鄙に五年すまひつゝ都の手ぶり忘らえにけり。

天平二年十二月六日　筑前國司山上憶良謹上

【語釋】◎あまざかる　鄙の枕詞。◎鄙　田舍、こゝは筑紫をさす。◎すまひ　住む。◎手ぶり　風俗。◎忘らえ　忘られ。

【通釋】遠い田舍に五年も住んで、優美な都の風俗も忘れてしまつたことだ。

貧窮問答の歌

（九九）風雜り　雨降る夜の　雨雜り　雪降る夜は　すべもなく　寒くしあれば　堅鹽を　取りつゞしろひ　糟湯酒　うちすゝろひて　しはぶかひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　鬚かき撫でて　あれを置きて　人はあらじと　ほころへど　寒くしあれば　麻ぶすま　引きかゞふり　布かた衣　ありのことごと　着そへども　寒き夜すらを　われよりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒からむ　妻子どもは　乞ひて泣くらむ　この時は　いかにしつゝ

【語釋】◎しぬばゆ　思ひ出される。◎いづくより云々　如何なる因緣で、何處から生れて來たものであるか。◎まなかひ　眼の前。◎もとな　心もとなし、と同じ意。やたらに。◎やすいしなさぬ夜の目も寢られぬ。「やすい」は安眠。「し」は助詞。「なさ」は「寢」に、敬語の助動詞「す」のついたものである。

【通釋】瓜を食べると、この瓜を食べさせたらどのやうに喜ぶだらうと、先づ子供のことが思ひ出され、栗を食べるとまして子供のことが思ひ出される。一體、子供は如何なる前世の因緣で、自分の子となつて生れたものであらうか。かうして、離れてゐると、その面影がやたらに眼の前にちらついて、夜の目も寢らない。

のことを思つて詠んだものと思はれる。如何にも子煩悩らしい溫情が溢れてゐる。瓜に栗、子供を思ひ出しさうなものだ。

反　歌

(九五) しろがねもくがねも玉も何せむにまされる寶子にしかめやも。

【語釋】◎しろがね　銀。◎くがね　こがねのことで、黃金。◎何せむに　何にならうぞ。◎子にしかめやも　子に越したものがあらうか、ありはしない。

【通釋】銀も金も珠も何にならうぞ、子にまさる寶が又と世にあらうか、ありはしない。

【批評】親の子供に對する愛情が實に率直にあらはれてゐるのがいゝ。

梅花の歌

(九六) 梅の花咲きて散りなばさくら花つぎて咲くべくなりにてあらずや。藥師張子福子

【語釋】◎藥師　醫師。◎なりにてあらずや　なつてゐるではないか。

【通釋】梅の花が咲いて、散つてしまつたなら、それに續いて櫻の花が咲くばかりになつてゐるではないか。

【批評】梅から櫻へと、應接に遑のない、のどかな春の樂しい氣分が漲つてゐる。

(九七) 遠つ人松浦作用姫つまごひに領布振りしより負へる山の名。

【批評】これは

太宰帥大伴卿、凶問に報ふる歌

（九二）世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり。

語釈 ◎凶問 死去の報。◎知る時し 「し」は強意の助詞。◎いよよ いよいよ。

通釈 かねて世の中ははかないものだとは聞いてゐるが、今自分の眞近に空しい事實を知つて、いよいよますます悲しさに堪へない。

【批評】人情をよく云ひあらはしてゐる。

反歌

（九三）久方の天路は遠しなほなほに家に歸りてなりをしまさに。

語釈 ◎久方の 天の枕詞。◎天路 天へのぼる道。◎なほなほに すなほに。◎なりをしまさに 家業をはげみなさい。「さ」は敬語の助動詞。「に」は「ね」と同じく希望の助詞。

通釈 天上へのぼつたら思ふまゝに出來るだらうけれども、その天へ上る道は遠いから、思ひ止つて、世間並に家業をはげみなさい。

子等を思ふ歌

（九四）瓜食めば　子等思ほゆ　栗食めば　ましてしぬばゆ　いづくより　來りしものぞ　まなかひに　もとなかゝりて　やすいしなさぬ。

【批評】この歌は憶良が筑紫にある時、都に殘した子供

る。

【批評】いぢらしい、而も純眞な小女の戀心が正直に詠まれてゐる。

【批評】眞劔な心が尊い。

【批評】思ふ人の名を惜しむ眞心がまことに美しい。

その間なりともあなたのお姿が見たうございます。

安都扉娘子の歌

（八九）み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる。

語釋 ◎み空 「み」は美稱の接頭辭。

通釋 空行く月の光で、たつた一目ちらと見たあの人が忘れられないで夢にまで見えた。

大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈れる歌

（九〇）人もなき國もあらぬか吾妹子とたづさひ行きてたぐひて居らむ。

語釋 ◎坂上大嬢　家持の叔母坂上郎女の女。後に家持の妻となつた人。◎あらぬか　あれかし。◎たづさひ行きて　手を取りあつて。◎たぐひて　並んで。

通釋 世間は口やかましい、何處かうるさい人のゐない世界があればいゝ、もしあるなら、可愛いゝ妹と手を取り合つて行つて、二人並んでをらうのに。

大伴坂上大嬢、大伴宿禰家持に贈れる歌

（九一）わが名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立てば惜しみこそ泣け。

語釋 ◎名はも 「も」は感動の助詞。◎千名の五百名　いろ〱云ひさわがれて浮名の立つこと。

通釋 私はどんなに云ひさわがれて樣々に浮名が立つても少しも厭ひませんが、あなたの名が立つたら、それこそあなたの爲に惜しんで泣くでせう。

【評】これは、旅人が、京に上つた後、筑紫の沙彌滿誓が贈つた歌に答へたものである。恐らく、佐保の旅人の邸宅から伊駒山あたりの上の空に浮んでゐる白雲を眺めやりつゝ詠んだものであらう。眼前の光景を提へてゐるのが勝れてゐる。

【評】これは二十五首中の一首である。作者の深い愁ひに沈んでゐる姿がさながらに描き出されてゐる。

【評】ひたすら別れを惜しんでゐる女の可憐な姿が眼前に浮び來るやうな歌である。

【譯】幸ひ月もよいし、川の水音もさやかに聞える。さあ、此處で、京に歸る人も、見送る人もゆつくり遊んで名殘を惜しまう。

大納言大伴卿の和ふる歌

（八六）こゝにありて筑紫やいづく白雲のたなびく山のかたにしあるらし。

【語釋】◎こゝにありて　こゝで。

【譯】こゝでは筑紫はどちらの方角に當るであらうか。あの白雲のたなびいてゐる山の方に當るらしい、思へば遠くも別れ來たものである。

笠郎女（かさのいらつめ）、大伴宿禰家持に贈れる歌

（八七）夕さればもの念（も）ひまさる見し人の言問（ことと）ふ姿面影にして。

【語釋】◎夕されば　夕になると。　◎言問ふ姿　ものを言ふ樣子。◎面影にして　面影に立つて。

【譯】夕方になると一層物思ひがまさつてくる、あの人の物を言ふ時の姿が面影に立つて。

豐前國娘子大宅女（おほやけめ）の歌

（八八）夕闇は道たづたづし月待ちていませわが背子その間にも見む。

【語釋】◎夕闇　月のおそく出る宵の闇。　◎たづたづし　たどたどし、と同じい。覺束ないさま。◎いませ　行きなさい。

【譯】こんな暗がりは道も覺束なうございます、もう直ぐ月が出ますから、それを待つてお出でなさい、

【批評】これは宇合が常陸國守の任を終へて歸京する時にその國で愛してゐたある娘子が詠んで贈つたものである。一二句の序にはその娘子自らの日常生活があらはれてゐて、可憐な感じがせられる。

【批評】「來む」「來ぬ」「來じ」と、各句の始めに頭韻した技巧がおもしろく、而も單なる語戯に終らないで、眞情が十分あらはれてゐる。

【批評】月下水流のほとりで袂別の宴を張つて名殘りを惜しんでゐる人々のさまが眼前に浮んでくる。

藤原宇合(うまかひ)大夫、任を遷されて京に上る時、常陸娘子の贈れる歌

(八二三)　庭に立ち麻を刈り干ししき慕(しぬ)ぶ東女(あづまをみな)を忘れたまふな。

【語釋】　◎庭に立ち麻を刈り干し　庭に立つて麻を刈つて干して敷く、と云ふ意で、下の「しき」の序である。　◎しき慕ぶ　頻りに慕ふ。　◎東女　東國の女、即ち娘女自身である。

【通釋】　頻りに慕ひ申してゐるこの東女のことを、京にお歸りになつてもお忘れ下さいますな。

大伴坂上郎女の和ふる歌

(八二四)　來むと云ふも來ぬ時あるを來じと云ふを來むとは待たじ來じと云ふものを。

【語釋】　◎和ふる歌　藤原麻呂に答へた歌で、四首ある中の一首だけ取つた。

【通釋】　來ると云つても何かの都合で來ない時もあるのだから、まして、始めから來ないと云ふのを來ると思つて待つことはすまい。はつきり來ないと云ふものを。

太宰帥大伴卿、大納言に任(まけ)られて京に入らむとする時に臨み、府の官人等卿を筑前國蘆城驛家に餞する歌

(八二五)　月夜よし川音(かはと)清(さや)けしいざこゝに行くも行かぬも遊びて行かむ。

右一首防人佑大伴四綱

【語釋】　◎蘆城　筑前國御笠郡御笠村の地。　◎月夜　ただ月のこと。　◎行くも　大伴旅人のこと。　◎行かぬも　官人等。　◎防人佑　サキモリノスケ。防人は、西海道の要所を守る兵士で、佑はその次官。

額田王、近江天皇（あふみのすめらみこと）(天智)を思ひて作れる歌

(八〇) 君待つとわが戀ひをればわがやどの簾（すだれ）動かし秋の風吹く。

【語釋】 ◎待つと　待つとて。　◎わがやど　わが家。

【通釋】 君のお出でになるのを待つて、戀しい思ひをしてゐると、たま〳〵秋風が吹いて來て、簾を吹き動かします。

【批評】 簾の動くのを、ふと君の來ましたのかと驚いたのである。人待つ者の微妙な心情がよくあらはれてゐる。

安倍女郎の歌二首

(八一) 今更に何をか思はむうち靡き心は君に縁（よ）りにしものを。

【語釋】 ◎何をか思はむ　何を案じ煩ふか、案じ煩ひはしない。　◎うち靡き　下の「縁り」にかゝる。

【通釋】 今更何をとやかく思ひ煩ひませう、もう私の心はすつかりあなたに靡きよつてをりますのに。

【批評】 すつかり頼りきつてゐるやうで、些か不安の念があらはれてゐる。とにかく微妙の心理を語つてゐる

(八二) わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にも吾なけなくに。

【語釋】 ◎物な思ほし　もの思ひなさるな。　◎吾なけなくに　吾なからなくに、の意で、即ち、吾なきにてはなく、吾あるものを。

【通釋】 あなたは何も御案じなさることはありません、何か事がありましたら、たとひ火の中、水の中に入るやうなことがありませうとも厭はない私があるではありませんか。

【批評】 強烈で、而も至純な感情が溢れてゐて人の心を動かさずにはおかないものがある。

を補つて見ると明かである。◎雲居　たゞ雲のこと。◎雨に　雨と。

【通釋】新羅の國から、人の言ふところを信じて、親しくもの云ひかはす親族や兄弟もないこの異國に渡つて來られて、天皇のお治めになつてゐる國の中でも、この奈良の都は繁華し、人家も多くあるが、そこには住まないで、どう考へたのであらうか、縁故もないこの寂しい佐保の山邊の大伴の家を幼兒の親を慕ふやうに頼つて來られて、そこに家を作り、永い年月の間住んでゐられたのに、生ける者は死ぬと云ふことは免れないものであるから、頼りに思つてゐる人々が皆旅に出てゐる間に、朝、佐保川を渡り春日野を後ろにして、山をさして出て行かれ、暗闇のやうに姿を隱してしまはれたから、私は、突然のことゝて、何とも言ひやうも知らず、どうしてよいかも知らないで、立つたり坐つたり、たゞうろ〳〵して、一人衣の袖の乾く間もなく歎いたことでありますが、この私の泣く涙が、母上のいらせられる有馬山に雲とたなびいて、雨となつて降つたでせうか。

反歌

（七九）留め得ぬ命にしあれば敷妙（しきたへ）の家ゆは出でて雲隱りにき。

【批評】長歌に劣らぬ莊重な調べがある。

【語釋】◎敷妙の　家の枕詞。◎家ゆ　家を。◎雲隱り　死んだこと。

【通釋】留めようとしても留めることの出來ない壽命であるから、遂に家をば出て、姿を隱してしまはれた。

は大伴家の人々にひどく慕はれ、愛せられたことが歌によくあらはれてゐる。尼の日本に渡來したことから筆を起して、大伴家の邸內に住むやうになつたこと、家の人々が旅にゐる間に尼の死んだことと並に葬送のことを叙して、最後に自分の悲歎を告げた筆の運びは巧みなものである

ども　いかさまに　思ひけめかも　つれもなき　佐保の山邊に　泣く兒なす　慕ひ來まし
て　しきたへの　家をも造り　あらたまの　年の緒長く　住まひつゝ　いまししものを
生ける者　死ぬとふことに　のがろえぬ　ものにしあれば　たのめりし　人のことごと
草枕　旅なるほどに　佐保川を　朝川わたり　春日野を　そがひに見つつ　あしびきの
山邊をさして　くらやみと　隱りましぬれ　言はむすべ　爲むすべ知らに　たもとほり
ただ一人して　白妙の　衣手干さず　嘆きつゝ　わが泣く淚　有馬山　雲居たなびき　雨
に降りきや。

【語釋】 ◎大伴坂上郎女　大伴旅人の妹。　◎尼理願　新羅から來て歸化した婦人である。旅人の佐保の家に寄寓してゐたのであるが、ちようど、母の石川命婦が有馬の溫泉に湯治に行つてゐた時、病歿したので、この歌を詠んで、母に送つたのである。　◎たくづぬの　新羅の枕詞。　◎人言をよしと聞かして　人の云ふ所を信じて。　◎問ひ放くる　たづねてくれる。　◎うち日さす　都の枕詞。　◎しみみ　繁く。　◎つれもなき　緣故のない。　◎佐保の山邊　大伴家のある處。　◎泣く兒なす　泣く兒の如く。　◎しきたへの　家の枕詞。　◎あらたまの　年の枕詞。　◎年の緒　ただ年のこと。「緒」は連續をあらはす。　◎住まひ　住む。「ひ」は繼續をあらはす助動詞。　◎死ぬとふ　死ぬと云ふ、の約。　◎のがろえぬ　のがれられない。　◎たのめりし人　石川命婦等。　◎草枕　旅の枕詞。　◎朝川わたり　朝、川を渡つて、葬送すること。　◎そがひ　背後。　◎あしびきの　山の枕詞。　◎くらやみと　暗闇のやうに。　◎隱りましぬれ　隱りましぬれば。　◎たもとほり　徘徊する。　◎白妙の　衣の枕詞。　◎衣手　袖。　◎干さず　淚の乾くひまのないこと。　◎有馬山　下に「に」

響は如何にも平明な歌ひぶりである。「おくつきは此處と聞けども」以下の句は、巻一の人麿の近江の荒都を偲ぶ長歌の句法によつたと思はれる。

【説評】當時はかうした歸化人が澤山ゐたが特にこの尼

【譯】昔の男が、倭文織りの帶を新しく締めかへ、新しい伏屋を造つて、求婚したと云ふ、あの勝鹿の眞間の手兒名の墓を此處だとは聞くが、木の葉の茂つて隱してゐる爲であるか、松の根が這ひはびこるほどに、永い年月を經た爲であるか、そこともはつきり分らない。しかし、自分はあのゆかしい物語、あの手兒名と云ふ名前を忘れることが出來ない。

反　歌

（一七六）吾も見つ人にも告げむ勝鹿の眞間の手兒名がおくつきどころ。

【語釋】◎おくつきどころ　墓所。

【譯】あの名高い勝鹿の眞間の手兒名の墓所を自分も見ることが出來た。まだ見ない人々に話して聞かせよう。

（一七七）勝鹿の眞間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手兒名し思ほゆ。

【語釋】◎玉藻　美しい藻。「玉」は美稱の接頭辭。

【譯】勝鹿の眞間の入江に水のまに〳〵打ち靡いてゐる美しい藻を刈り取つた、古の手兒名の姿が想像される。

七年（天平）乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去を悲嘆して作れる
歌一首並に短歌

（一七八）たくづぬの　新羅の國ゆ　人言を　よしと聞かして　問ひ放くる　親族兄弟　無き國に　渡り來まして　大君の　敷き坐す國に　うち日さす　京しみゝに　里家は　多にあれ

羇旅の歌

（七二）島傳ひ敏馬(みぬめ)の埼を漕ぎためば大和こひしく鶴(たづ)さはに鳴く。

【語釋】◎島傳ひ　島々を傳ひ行く。　◎敏馬　攝津武庫郡都賀濱村・都賀野村あたりの古名。　◎漕ぎため　漕ぎ巡る。　◎さはに　澤山。

【通釋】島々を傳ひながら敏馬の埼を漕ぎ巡つて行くと故郷の大和がしきりと戀しく思はれる折から、鶴が澤山鳴いて通る。

【批評】これは長歌の反歌である。海上を鶴の鳴き渡るのは實にいゝ。大空を眞直ぐに飛んで行く鶴を見て、島々を傳ひながら漕ぎ行く船旅をどんなにかもどかしく思つたことであらう。

勝鹿(かつしか)の眞間娘子(まゝのをとめ)の墓を過ぎし時、山部宿禰赤人の作れる歌一首並に短歌

（七三）古に　ありけむ人の　倭文幡(しづはた)の　帶解きかへて　ふせ屋立て　妻問(つまど)ひしけむ　葛飾(かつしか)の　眞間(まま)の手兒名(てこな)が　おくつきを　此處とは聞けど　眞木の葉や　茂りたるらむ　松が根や　遠く久しき　言のみも　名のみも吾は　忘らえなくに。

【語釋】◎勝鹿眞間娘子墓　下總國東葛飾郡眞間村の眞間川の岸にある。　◎古にありけむ人　眞間の娘子に戀ひした男。　◎倭文幡　倭文の織物のこと。倭文は、線を織り合した文樣で、その線には、横縞も縦縞もある。又、縦横の縞を交叉した市松模樣のもあつた。　◎帶解きかへて　帶を新に締めて。　◎ふせ屋　棟の低い小屋。上代では妻を迎へる時には新に家を造つたのである。　◎妻問　結婚を申し出る。　◎おくつき　墓。　◎眞木　檜杉などの良木。　◎松が根や　松が老いてゐるやうに遠い過去のこと。　◎言のみも名のみも　その手兒名の物語、その名。　◎忘らえなくに　忘れることが出來ない。

【批評】手兒名を歌つたものはこの他に巻九にも、巻十四にもある。この傳說は當時よほど名高いものであつたのであらう。しかし材料が傳說だけに、どうもこの歌もひし／＼と人の心を動かすところはない。（全）

【批評】國司に任ぜられて、海を渡つて行く時の作である。天皇に對する敬虔の情がまことに濃やかである。

【批評】いかにも靜寂な景趣である。そしてその表現又實に巧みで、寫生の妙を極めてゐる。

【批評】女らしい細やかな心づかひがよく現れてゐる。

石上大夫の歌

（七一）大船に眞楫しじぬき大君の命かしこみ磯廻するかも。

【語釋】◎眞楫　「眞」は接頭辭。「楫」は艣・櫂（カヒ）などの如く、水を搔いて船をやる具。舵とは異る。◎しじぬき　船の左右に澤山の楫を附ける。◎磯廻　岸に沿うて漕いで行くこと。

【通釋】大君の仰を畏みて、船に澤山の櫓を取り附けていそがしく岸に沿うて漕いで行くことである。

湯原王、芳野にて作れる歌

（七二）吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして。

【語釋】◎湯原王　天智天皇の皇子の施基親王の御子、湯原親王。◎吉野なる　吉野にある。◎夏實の河　吉野川の上流の名。◎山陰にして　山陰で。

【通釋】吉野の夏實の川の川淀で鴨が鳴いてゐる、あの山蔭で。

筑紫の娘子、行旅に贈れる歌

（七三）家思ふと心進むな風守りよくしていませ荒きその路。

【語釋】◎筑紫の娘子　筑紫のある小女が大和の方へ行く人に贈つたのである。◎家思ふと　家を思ふとて。◎心進むな　あわてるな。◎風守り　順風を待ち伺つて。◎よくして　上の語に續く。即ちよく天候を伺つて。◎いませ　行きなさい。

【通釋】都の家人のことを思ふあまりに、あわてゝ船出をなさいますな、十分に天候を伺つておいでなさい。あの風波の荒い海上ですから。

最も強くあらはれてゐる。

【批評】 譬喩がまことに巧みでよく世の中の無常さを現はしてゐる。

【通釋】 この世でさへ樂しかつたなら、來世では蟲に生れようが、鳥にならうが、かまはない。

（六八） 生ける者遂には死ぬるものにあればこの世なる間は樂しくをあらな。

【語釋】 ◎この世なる間　この世にある間。　◎樂しくをあらな　樂しくありたいものだ。「を」は感動の助詞。

【通釋】 生きてゐる者はどうせ一度は死ぬるのであるから、この世にゐる間は、出來るだけおもしろく暮したいものである。

（六九） もだをりて賢しらするは酒飲みて醉泣するになほしかずけり。

【語釋】 ◎もだをりて　默つてゐて。　◎しかずけり　勝つてゐない、即ち劣る。

【通釋】 默つてゐて賢こぶつてゐる人は、むしろ酒を飲んで醉泣をする人に劣つてゐる。

沙彌滿誓の歌

（七〇） 世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎにし船の跡なき如し。

【語釋】 ◎何に譬へむ　たとへるものもない。　◎朝びらき　朝、船が湊を出ること。　◎漕ぎにし　漕ぎ去つた。　◎跡なき如し　跡方もなく見えなくなること。

【通釋】 世の中の無常は實に譬へるものもない、まあ強ひて言つて見れば、恰も朝に湊を漕ぎ出して行つた船の、忽ちに跡をも止めず隱れてしまふやうなものである。

【備考】 この歌を拾遺集には、「世の中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎ行く船のあとの白浪」として入れてゐるが、全く原作の趣を失つてゐる。

（六四）價なき寶と云ふとも一坏の濁れる酒に豈まさらめや。

【語釋】◎價なき寶　價のつけられぬほど貴い寶。法華經の「無價寶珠」から云つたものである。◎豈まさらめや　どうして勝らうか、まさりはしない。

【通釋】價のつけられぬほどの貴い寶だとて、一坏の濁り酒にどうしてまさらうか、勝りはしない。

（六五）夜光る玉といふとも酒飮みて心をやるに豈しかめやも。

【語釋】◎夜光る玉　支那の歴史や傳說に多く見えてゐる。◎心をやる　氣を晴らす。◎豈しかめやも　及ぶものはない。

【通釋】あの夜光るやうな立派な玉でも、酒を飮んで氣を晴らす樂しみにはどうても及ばない。

（六六）世の中の遊びの道に冷しくは醉泣するにあるべかるらし。

【語釋】◎遊びの道に　種々の遊びの道の中に。◎さぶしく　さびしい。

【通釋】世間のいろ〳〵の遊びの道に交つてさびしい、もの足りないなら、酒を飮んで醉うて泣くのが一ばんよからう。

【備考】「冷しくは」の冷は怜の誤りとして、「樂しきは」と讀む說もある。さうすると、意味が全く反して、世間に、遊びの道は多いが、その中で、最も樂しいのは、酒を飮んで醉ひ泣きすることであらう、の意となる。

（六七）この世にし樂しくあらば來む世には蟲にも鳥にも吾はなりなむ。

【語釋】◎この世にし　現世で。「し」は强意の助詞。◎來む世　來世。未來の世。

【批評】現世を享樂する心が

ふ。　◎賢き　賢い。

【通釋】古のあの晋の竹林の七賢人達は無欲恬淡の人達であつたが、而し欲しがつたものは酒であらう。

（三四〇）賢しみと物云ふよりは酒飲みて醉ひ泣きするしまさりたるらし。

【語釋】◎賢しみと　賢こぶつて。　◎するし　するのが。「し」は强意の助詞。

【通釋】賢こぶつて下らないことを云ふよりは、酒を飲んで、醉ひ泣きするのが、はるかにましだらう。

（三四一）言はむすべ爲むすべ知らに極りて貴きものは酒にしあるらし。

【語釋】◎言はむすべ　言ふ方法。　◎知らに　知らないで。

【通釋】何と言ひやうもなく、何と爲る方法なく、極めて貴いものは酒であらう。

（三四二）なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしがも酒に染みなむ。

【語釋】◎なかなかに　却て。いつそ。　◎人とあらずは　人とあらずには。　◎なりてしがも　なりたいものだ。

【通釋】いつそ人間であらずに、酒壺になりたいものだ、さうしたら、朝から晩まで酒に染みてゐられよう。

（三四三）あなみにく賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る。

【語釋】◎あな　あゝ。　◎賢しらをすと　賢こぶらうとして。

【通釋】あゝ見つともない、賢こぶらうとして、酒を飲まない人をよく見ると、小賢しい猿に似てゐる。

【批評】人間はつれづれだと嘲つたのである。

動してゐる。「その彼の母も」と戯れて云つたのも宴會の席としては如何にもふさはしい。

【批評】 以下十三首は旅人の讃酒の歌で、これらは旅人が酒に託して、當時の生儒者生佛法者を嘲笑したものと思はれる。而して又、そこに、おのづから旅人の樂天的、現世的の思想が現はれてゐる。

の彼の母　その子供の母、即ち自分の妻のこと。

〔通釋〕 憶良はもう歸りませう。家では子供が私を戀ひしがつて泣いてゐるでせうし、その子の母も私の歸るのを待つてゐることでせう。

太宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首

(五七) しるしなき物を思はずは一坏(つき)の濁れる酒を飲むべくあるらし。

〔語釋〕 ◎太宰帥大伴卿　名は旅人。家持の父である。左將軍・中務卿・中納言・隼人征伐の持節大將軍等を經て、聖武天皇の神龜元年、正三位に叙せられて、太宰帥となつて筑紫に下り、七年間その地にあつて、天平二年大納言に任ぜられて歸京し、翌三年に從二位に叙せられ、その七年に薨じた。◎しるしなき　無益な。◎思はずは　思はずには。◎一坏　坏は土製の酒を盛る器。◎あらし　あるらし、の約。

〔通釋〕 つまらない物思ひに耽つてゐないで、寧ろ一坏の濁酒を飲んで、憂ひを忘れる方がましだ。

(五八) 酒の名を聖(ひじり)とおほせし古への大き聖の言(こと)のよろしさ。

〔語釋〕 ◎酒の名を云々　酒に聖人と云ふ名を負はした。「太祖禁レ酒而人竊飲。故難レ言レ酒。以二白酒一爲二賢者一以二清酒一爲二聖人一」(魏書)。◎大き聖　大聖人。酒を聖人と稱へた人。

〔通釋〕 酒のことを聖人と稱した、古の大聖人の言はまことにすぐれてゐる。

(五九) 古への七の賢(さか)き人どもも欲(ほ)りせしものは酒にしあるらし。

〔語釋〕 ◎七の賢き人ども　晉の竹林の七賢人。即ち、嵆康・阮籍・山濤・劉伶・阮咸・向秀・王戎を云

が、まことに平明に、素直に描き出されてゐる。主觀的な詠歎の語のないところに、却て無限の趣がある。

【鑑賞】奈良の都の全盛をたゝへ、當代を謳歌したのである。咲く花のにほふのに譬へたところ、まことに適切である。

【批評】綿を始めて見た時の感じがすなほに詠まれてゐる。今日とは隔世の感のあるのも面白い。

【鑑賞】憶良のやさしい夫として、父としての面目が躍

【語釋】◎田兒の浦ゆうち出でゝ見れば　田兒の浦に出て見ると。「ゆ」は「より」の意であるが、こゝは「に」の意に見る。◎雪は降りける　雪が降つてゐる。

【通釋】田兒の浦に出て見ると、青空に聳え立つてゐる富士の高嶺には雪が眞白に降り積つてゐるのが見える。

太宰少貳小野老（おゆ）朝臣の歌

（三四）あをによし奈良の都は咲く花のにほふが如く今盛りなり。

【語釋】◎あをによし　奈良の枕詞。◎にほふ　色の美しいこと。

【通釋】奈良の都は美しく咲いた花のやうに、今や實に全盛である。

沙彌（さみ）滿誓、綿を詠める歌

（三五）しらぬひ筑紫の綿は身につけて未だ着ねども暖けく見ゆ。

【語釋】◎沙彌　梵語で、沙門と云ふのと同じい。宿侶のこと。◎滿誓　俗名は笠朝臣麻呂。元明天皇の養老五年に出家し、七年に、筑紫の觀音寺が建立せられ、その別當となつた。◎しらぬひ　筑紫の枕詞。◎筑紫　九州の古名。◎綿　太宰府から年々宮中に獻つたものと思はれる。

【通釋】筑紫の綿と云ふものは、まだ實際に身につけて着ては見ないが、如何にも暖かさうに見える。

山上憶良、宴を罷（まか）る歌

（三六）憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼（か）の母も吾（あ）を待つらむぞ。

【語釋】◎宴を罷る　宴會から歸る。◎憶良ら　憶良自身のこと。「ら」は語調を添へる接尾辭。◎そ

それで妹の家に行く道。◎やゝ間遠き　まだ餘程遠い。◎夜渡る月　空行く月。◎競ひあへむかも　月が入るのと、自分が家に到るのと、先きを競ひ得られようか。

【通釋】妹の家に行く道はまだ餘程遠いのだが、空行く月が山に入らぬ先に行き着くことが出來るであらうかしらん。どうも競爭はむつかしいやうだ。

山邊宿禰赤人、不盡山を望める歌一首並に短歌

（五二）天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語り繼ぎ　言ひ繼ぎ行かむ　富士の高嶺は。

【語釋】◎山邊赤人　聖武帝の御代の人。◎不盡山　富士山のこと。◎天地の分れし時ゆ　天と地と始めて分れた開闢の時から。◎神さびて　神々しくて。◎天の原ふりさけ見れば　空遙かに仰ぎ見ると。◎影もかくろひ　日の光りも隱れ。◎い行き　「い」は接頭辭。◎時じく　何時と云ふ定まりもなく。◎語り繼ぎ言ひ繼ぎ行かむ　同時代のまだ見ない人に普く語り傳へよう。

【通釋】天と地の始めて分れた太古の時から、神々しく高く貴い姿をして、聳え立つてゐる駿河にある富士の高嶺を、大空遙かに仰いで見ると、空を行く太陽の光りも山に隱れ、夜照る月の光も山のために見えない。又白雲も山の近くを通り過ぎるのを遠慮してをり、そして、山には何時と云ふ、定まりもなく雪が降つてゐる。この崇高な富士の高嶺のさまを、まだ見ない人々に普く語り傳へて行かう。

反　歌

（五三）田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける。

【批評】夜の明けぬうちにと月を仰ぎ仰ぎ道をひたすら急いでゐる樣子が想像されておもしろい。

【批評】「天地の分れし時ゆ」と歌ひ起してまづ時間的に莊重な感を與へ、「渡る日の」以下八句に、空間的に崇高の姿を描き出したところ結構頗る妙を得てゐる。「神さびて、高く、貴き」の形容は又富士山にして始めて云ひ得る言葉であらう。

【批評】富士の雄姿を仰ぎ見た時の感じ

を追懷して詠んだのである最初に「近江の海」と置いたところ、何となく作者の思ひの縹渺として果てしもないやうに感ぜられる。

【批評】「鶴鳴きわたる」を繰り返したところに、いかにも澤山の鶴が群をなして飛んで行く光景が現れてゐる。今日は到底見られない壯大な光景である調も頗る強い。

【批評】實に氣持ちのいゝ歌だ。遙々と山を越えて來て、遠く家郷を望むところ、かうした旅情はなつかしいものだ。

【語釋】◎近江の海　琵琶湖。◎夕浪千鳥　夕日の赤々と輝いてゐる浪の上に亂れて鳴いてゐる千鳥。◎心もしぬに　心が愁へ萎れて。◎いにしへ　大津の宮の往時。

【通釋】夕日の赤々と照してゐる琵琶湖の浪の上を亂れて鳴き立つ千鳥よ、汝の鳴く音を聞くと、いよ／＼心がしぼれて、古のことが思はれてならない。

高市連黑人の羇旅の歌

(四九)櫻田へ鶴鳴きわたるあゆち潟潮干にけらし鶴鳴き渡る。

【語釋】◎櫻田　尾張愛知郡作良のあたりの田。◎あゆち潟　今の熱田新田。今は陸地となつてゐる。

【通釋】作良の田の方へ澤山鶴が鳴きながら飛んで行く。あゆち潟の潮が干たのであらう、澤山鶴が鳴いて行く。

志賀に幸せる時、石上卿の作れる歌

(五〇)こゝにして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて來にけり。

【語釋】◎こゝにして　此處にて。◎家やもいづく　わが家のある都は何處にあらうか。

【通釋】こゝまで來て見ると、わが家のある都は何の邊であらう。思へば、あの白雲の靡いてゐる山を越えて遙々と來たことである。

中納言安倍廣庭卿の歌

(五一)子等が家道やゝ間遠きをぬばたまの夜渡る月に競ひあへむかも。

【語釋】◎安倍廣庭　右大臣御主人の子、天平四年歿、年七十四。◎子等が家道　こゝの子は妹のこと。

柿本朝臣人麿、近江國より上り來る時、宇治河の邊に至りて作れる歌

（二六四）ものゝふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも。

【語釋】◎ものゝふの八十　八十氏から宇治河に云ひかけた序詞である。◎網代木　冬の頃、氷魚を捕る爲に設けた梁の一種で、その水上に現はれてゐる杭。◎いさよふ　水が堰かれてしばらくためらふこと。

【通釋】宇治川の網代木に堰かれて、暫らくためらう水が直ぐ又流れ去つて行方知れずになるのが、いかにも世の果敢なさに似てもの哀れである。

【批評】何となくしんみりとした寂しい心をさそはれる。

長忌寸奥麿の歌

（二六五）苦しくも降り來る雨か三輪が埼佐野のわたりに家もあらなくに。

【語釋】◎降り來る雨か　「か」は感歎の助詞。◎三輪が埼　紀伊國東牟婁郡新宮の南一里許りの海岸にある村。その附近に佐野と云ふ村がある。◎わたり　舟の渡し場。◎あらなくに　あらぬに、の意。

【通釋】難儀にも雨がひどく降ることである。三輪が埼の佐野の渡し場には雨宿りする家もないのに、これは困つたものだ。

【批評】作者の如何にも難儀してゐる樣子が想像される。この歌を本歌として、定家の詠んだ「駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮」と云ふのは世に有名である。

柿本朝臣人麿の歌

（二六六）淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ。

【批評】琵琶湖畔に佇んで、近江朝廷の昔

月が出たのを早速蓋に見たてたところ、即興の作としてまことに著想がすぐれてゐる。

【批評】これは大和を立つて西國へ下る時の歌と思はれる何と云ふことなしに、海上の平穩な、いかにも樂しさうな趣のある作である。

【批評】戀ひしいとも、懷しいとも云つてゐないところに却て深い餘韻がある。

語釋 ◎長皇子　天武天皇の皇子。　◎獵路池　磯城郡多武峰村大字鹿路にあつた。　◎ひさかたの　天の枕詞。　◎綱にさし　綱に通し。　◎蓋　絹で張つた長柄の傘で、貴人にさしかけるものであるが、傾き易いので、左右に綱を通して、兩方へ引張つて行くものである。

通釋 御獵場で日が暮れて月が現れた。わが大君はその月に綱を通して、蓋にしていらせられる。さても貴い御樣子である。

柿本朝臣人麿の羈旅の歌

（四四）　玉藻苅る敏馬（みぬめ）を過ぎて夏草の野島が埼に舟近づきぬ。

語釋 ◎玉藻苅る　海・川・島の枕詞であるが、こゝは敏馬の修飾語と見てよい。　◎敏馬　攝津灘村の地で、大阪から神戸へ行く途中の海濱である。　◎夏草の　野の枕詞。　◎野島が埼　淡路の北端の野島村の地。

通釋 美しい藻を苅る敏馬の浦を過ぎて、淡路の野島の埼に乘つてゐる舟が近づいた。

（四五）　天ざかる鄙の長道（ながち）ゆ戀ひ來れば明石の門（と）より大和島見ゆ。

語釋 ◎天ざかる　鄙の枕詞。　◎長道ゆ　こゝの「ゆ」は「を」の意である。　◎明石の門　明石海峽。　◎大和島　海上から大和の土地をさして云つたもの。

通釋 都に遠い田舍の長い路を故郷を戀ひしく思ひながら歸つて來ると、明石の海峽からなつかしい大和の方が見え出した。

【通釈】皇子を失ひ奉つて、仕へ奉る所もなく舎人の迷つてゐるのが哀れである。

巻　三

天皇（持統）、志斐嫗に賜へる御歌

（四一）否と言へど強ふる志斐のが強語このごろ聞かずてわれ戀ひにけり。

【語釈】◎志斐　姓。話好きの老婆であつたと思はれる。　◎嫗　老女のこと。　◎志斐のが「の」は、餘情を添へる助詞。　◎強語　無理に聞かせる話。　◎聞かずて　聞かずして、の約。

【通釈】もう聞きたくないと云つても、無理に聞かせる志斐の嫗の無理強ひの話を近頃聞かないで、戀ひしくなつたぞ。

【批評】諧謔の御歌である。強ふる、志斐の強ひ語と、つづけて頭に同音を重ねてあるのが、面白い。

志斐嫗の和へ奉れる歌

（四二）否と云へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは申せ強語とのる。

【語釈】◎詔らせこそ　詔らせばこそで、仰せられるので。　◎志斐いは　「い」は、主格を示す助詞。

【通釈】お話し申し上げるのはいやですと申しましても、無理に語れ／＼と仰せられますので、私はお話しいたすのです、それを強ひ語りと仰せられますのは、どうも心得られませぬ。

【批評】負けてゐないで、やはり諧謔を以て御返歌したのが面白い。

長皇子、獵路池に遊びたまへる時、柿本朝臣人麿の作れる歌

（四三）ひさかたの天行く月を綱に刺しわが大君は蓋にせり。

【批評】この歌は長歌の反歌である頭上に

句を反覆して、綿々たる情緒を述べたところさすがに巧みである。

【批評】「久方の天知らしぬる」は、皇子の薨去を現はす言葉として、まことに巧妙で適切である

【語釋】◎太后　皇后で、後の持統天皇。　◎見し給ふらし　御覽になる。こゝの「らし」は推量の助動詞であるが、過去の推量に用ゐた。　◎神岳　飛鳥村大字雷にある雷丘。　◎今日もかも　「かも」は感動の助詞。　◎問ひ給はまし　お訊ねになるであらうに。この上に、天皇がもしこの世におはしますなら、の意の言葉を補つて見る。　◎ふりさけ見つゝ　遙かに仰ぎ見て。　◎あやに　ひどく。極めて。　◎うらさび　もの寂しく。　◎荒妙の　衣の修飾語で、喪服のこと。　◎ひる　乾く。

【通釋】わが天皇が御在世の時は、夕方になれば御覽になり朝になればお尋ねになつた神岳の山の紅葉を、もし今もこの世におはしませば、今日はお問ひになるであらうに、明日は御覽になるであらうに、今はそれもせん方なく、その神岳の山を仰ぎ見て、夕方になるとひどく悲しく、朝になると何となく心寂しくて、喪服の袖は乾く時もないことである。

短歌二首

（三九）久方の天知らしぬる君故に月日も知らに戀ひわたるかも。

【語釋】◎天知らしぬる　神となり給うて天上を知し召していらせられる、と云ふ意で、薨去されたこと。　◎君故に　君であるものを。　◎知らに　知らず。

【通釋】今はもう、神となつて天にお上りになつた皇子であるのに、まだ歎きが止まず、月日の過ぎるのも覺えず、お慕ひ申し上げることである。

（四〇）埴安の池の堤の隱沼の行方を知らに舍人はまどふ。

【語釋】◎埴安の池の堤の隱沼の　下の「行方を知らに」の序である。　◎隱沼　堤の下を流れる隱れ水。　◎舍人　昔、天皇及び皇族に近侍した雜掌。

う。まことに同情に堪へぬ思ひがする。

【批評】天皇の御壽命を天によせて、その長久を祈らせられたところ、如何にも皇后の御歌らしい崇重の趣があると共に、強い信念が現はれてゐる。

【批評】さすがに御女性だけに、優しいお心づかひである。

【批評】人の死んだ後に思ひ出の種となるべきものが殘るほど悲しいことはない。神岳の紅葉に寄せて、同じ

【語釋】◎聖躬　天皇の大御身。◎不豫　御病。天智帝は即位十年九月から御不豫で、その年十二月に崩御になつた。◎太后皇后　古人大兄皇子の皇女倭姫王である。

【通釋】大空を仰いで見ますと、廣々としてゐるみ空は、恰も陛下の御命の限りないのを示してゐるやうで、御壽命の長久は疑ひもございません。今度の御病氣も直ぐ御快癒になられることゝ存じます。

太后の御歌一首

（三七）いさなとり　近江の海を　沖さけて　漕ぎ來る船　邊附きて　漕ぎ來る船　沖つ櫂　いたくなはねそ　邊つ櫂　いたくなはねそ　若草の　夫の　思ふ鳥立つ。

【語釋】◎太后　前の歌と同じ皇后。◎いさなとり　海の枕詞。◎沖さけて　沖の方へ遠ざかつて。◎邊附きて　岸に沿うて。◎沖つ櫂　沖を漕ぐ舟の櫂。◎若草の　妻の枕詞　こゝは夫の枕詞に用ゐた。つまは夫婦何れをも呼んだ。

【通釋】近江の湖を遠く沖を漕いで行く舟よ、強く櫂を撥ねるな。又、岸邊に沿うて漕いで行く舟よ、櫂をひどく撥ねるな。夫の命が御生前御覽になつてお慰みになつた鳥が驚いて飛び立つではないか。

天皇（天武）、崩じ給ひし時、太后の作りませる歌

（三八）やすみしし　わが大君の　夕されば　見し給ふらし　明けくれば　問ひ給ふらし　神岳の　山の紅葉を　今日もかも　問ひ給はまし　明日もかも　見し給はまし　その山を　ふりさけ見つゝ　夕されば　あやに悲しみ　明けくれば　うらさび暮らし　荒妙の　衣の袖は　ひる時もなし。

同じく反歌である。笹の葉の風にさや〳〵と鳴る寂しい山路を行けば妻を思ふ情は一層切であらう。景情共に寂寥としてゐて心ひかれざるを得ない。

【評釋】あてにもならぬものを當てにして行かれる心はまことにいたましい。

【評釋】これも前の御歌と同じ時の作であるもし捕はれの身でなかつたら、たとへ旅宿のなかつた昔とても、かゝるわびしさはされなかつたであら

【語釋】◎さやに　さや〳〵鳴るさま。　◎さやぐ　騒ぐ。

【通釋】妻に別れて山路を來ると、笹の葉が風に吹かれてざわ〳〵騒がしいけれども、その音にも紛れず、自分はただ妻のことを思ふばかりである。

有間皇子(ありまのみこ)自ら傷みて松が枝を結べる歌

(三四)　磐代(いはしろ)の濱松が枝(え)を引き結びまさきくあらば又かへり見む。

【語釋】◎有間皇子　孝德帝の皇子。齊明天皇の朝に、天皇が紀伊に行幸の時、謀反をはかつたのが顯はれ、紀伊國に送られ、藤白と云ふ所で絞殺された。この歌は、その前日、途中の磐代の濱で詠まれたもの。　◎磐代　紀伊國日高郡にある。　◎引き結び　上代は木や草を結んで、無事を祈り、又は心の占とした風習があつた。　◎まさきく　幸ひ。無事。

【通釋】かうして、磐代の濱邊の松の枝を引結んで無事を祈つて行く、もし幸ひに申し開きがたつて無事であつたならば、又歸つて來てこの松を見るであらう。

(三五)　家にあれば笥(け)に盛る飯(いひ)を草枕旅にしあれば椎(しひ)の葉に盛る。

【語釋】◎笥　食物を盛る器。　◎草枕　旅の枕詞。　◎椎の葉　笥の代用としたのである。

【通釋】家に居れば、笥に盛つて食べる飯を、今はこのやうにわびしい旅であるから、椎の葉に盛つて食ふことである。

天皇(天智)、聖躬不豫の時、太后(おほきさき)の奉れる御歌

(三六)　天の原ふりさけ見れば大君の御壽(みいのち)は長く天足(あまた)らしたり。

寢た妻。　◎露霜の　置くの枕詞。　◎八十隈　多くの曲り角。　◎いや　ますます。　◎夏草の　しなえの枕詞。　◎しなえ　萎える。　◎妹が門　妹が家。　◎靡く　高い山が崩れて、横に低く延びる意。　◎この山　眼前の山である。

石見の國の都農の海岸には別におもしろい浦もなく潟もなくてつまらぬ處だと人は思ふであらうか、どう思ふとまゝよ、たとへ、よい浦は無くとも、又おもしろい潟は無くとも、ちようど、その海岸には、沖の方から渡津の荒い磯邊に、眞青な美しい藻や、沖の藻を朝吹く風が寄せ、夕べに打ち寄せる浪が寄せて來るが、その寄せて來る浪と共に、あつちに寄つたり、こつちに寄つたりする玉藻のやうに、自分に寄り添うて寢た妻と共に暮らしたので樂しく住むことが出來たのであるのに、今その妻を殘して置いてひとり京に上るので、この道中の曲り角毎に、振り返つて見るが、なつかしい里は次第に遠ざかつてしまつた。そして、山道はだんだん高くなつて來た。妻はさだめし自分を慕つて、萎れ返る夏草のやうに、しよげ切つてゐるであらう。妻の姿は見えなくとも、せめて妻の家でも見たい、この山よ靡き伏してくれ。

反　歌

（三二）　石見のや高角山（たかつぬやま）の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか。

◎石見のや　「や」は感動の助詞。　◎高角山　長歌の都農の山で、今日は島星山と云ふ。「高」はただ添へた詞である。　◎木の間より　直ぐ下の「わが振る袖」にかゝる。

石見の國の都農の山の木の間から、名殘を惜しんで自分が袖を振つてゐるのを、妻にはそれとわかつたであらうか。

（三三）　小竹（さゝ）の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふわかれ來ぬれば。

ゐる。「妹が門見む靡けこの山」と結んで感情の高調を歌ひ放つたところがまことによい。

【批評】　木の間から袖の翻るのが眼前にありありと浮んでくる。

【批評】　これも

御歌に對してまことにふさはしい御返歌である。これで皇子も御歌を贈られた甲斐があつたであらう。

【評説】「いさなとり」以下「玉藻なす」まで十三句は石見の海岸の景色を叙べ、同時に、下の「より寢し妹」の序としたもので、實に巧みな用び方である。一篇よく愛妻と別れて遠く行く夫の切實な感情を優雅に表して

(三〇) 古に戀ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが戀ふる如。

【語釋】◎けだしや鳴きし 「けだし」は下の戀ふるへかけて見る。

【通釋】あなたの御歌にはただ鳥とだけありますが、古を戀ふる鳥は霍公鳥でせう、そのほとゝぎすはどんなに鳴いたでせうか、もし、私が古を戀ひて泣くやうに鳴いたでせうか。

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り來る時の歌

(三一) 石見の海 角の浦回を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無けども よしゑやし 潟は無けども いさなとり 海邊をさして わたづの 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝はふる 風こそ寄せめ 夕はふる 浪こそ來寄せ 波のむた かよりかくより 玉藻なす より寢し妹を 露霜の 置きてし來れば この道の 八十隈毎に よろづたび 顧みすれど いや遠に 里はさかりぬ いや高に 山も越え來ぬ 夏草の 思ひしなえて しぬぶらむ 妹が門見む 靡けこの山。

【語釋】◎角の浦 以前の都農郡、即ち今の那賀郡都農・都野津・二宮村あたりの海岸である。◎浦回 浦邊。◎浦 入江又は湊のこと。◎潟 洲のこと。◎見らめ 見るらめの奈良朝の語法。◎よしゑやし よしまゝよ。◎いさなとり 海の枕詞。◎わたづ 江川の河口の東岸にある渡津である。◎荒磯の上 荒い磯邊。◎か青 「か」は接頭辭。◎玉藻 「玉」は美稱。◎朝はふる 「はふる」は羽振るで、鳥の羽ばたきをすること。こゝは風の吹き煽ること。◎波のむた 波と共に。◎かよりかくより あちらに寄り、こちらに寄る。藻のうち靡くさま。◎より寢し妹 寄り添うて

【通釋】わが住む都には今朝大雪が降つて、實に美しい眺めである。そなたの住む大原はさびれた土地であるから、雪の降ることもとゝよりはきつと後であらう。

藤原夫人、和へ奉れる歌

（二八）わが岡のおかみに言ひて降らしめし雪の摧しそこに散りけむ。

【語釋】◎おかみ　龍神で、雨や水を掌る神。◎くだけし　破片。「し」は强意の助詞。

【通釋】大雪が降つたと仰せられますが、それは、私の居ります里の岡の龍神に私が云ひつけて、降らせました雪の破片が、少しばかり君のいらせられます處に降つたのでございませう。それを大雪が降つたなどと仰せられますのはおかしうございます。

吉野宮に幸せる時、弓削皇子、額田王に贈り與ふる歌

（二九）古に戀ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く。

【語釋】◎吉野に幸せる時　持統天皇の御幸である。◎弓削皇子　天武帝の皇子。◎古に　古をと同じ。◎戀ふる鳥　鳥は霍公鳥である。◎弓弦葉　地名。◎御井　秋津の離宮の邊にあつたのであらう。

【通釋】今ほとゝぎすが御井の上の空を鳴渡るのは、その昔、御父天皇が此處に行幸になつたその時を、自分が戀ひしく思ひ奉るやうに、ほとゝぎすも戀しく思つてであらうか、如何にも心ありげに鳴き渡り行く。

額田王、和へ奉れる歌

【批評】天皇の諧謔に對して負けず云ひ返したところがおもしろい。

【批評】感慨深く昔を追懷してゐられるさまがよく表れてゐる。

【批評】皇子の

【批評】これは磐姫皇后の御作歌で、四首中の第三首である。その御忍耐强さに感動させられる。

【批評】「安見兒得たり」を二度繰り返したところに、如何にも得意な、いかにも滿足なさまが、しかも素直にいひあらはされてゐて、思はずほゝえまさせられる。

【批評】もとより戲れてお詠みになつたのである。その無邪氣さが如何にもおもしろい。

(二三) ありつゝも君をば待たむうち靡くわが黑髮に霜の置くまでに。

〔語釋〕 ◎ありつゝも　かうして何時までもぢつとしてゐながら。◎うち靡く　髮の修飾語。◎霜の置くまでに　夜が更けて髮に霜が降るまでに。

〔通釋〕 かうして何時までもぢつとして君のお歸りをお待ちしてゐよう、夜がだん〳〵更けて、私のふさ〳〵した黑髮に霜が降り置くまでも、家の中にも入らないでお待ちしてゐよう。

内大臣藤原卿(鎌足)采女(うねめ)安見兒(やすみこ)を娶(え)たる時作れる歌

(二六) われはもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり。

〔語釋〕 ◎采女　諸國の郡領以上の者の姉妹や娘の美貌なものを宮中に召して、主上に御饌に仕へさせた宮女。◎安見兒　采女の名。◎もや　二字とも感動の助詞。◎得がてにすとふ　得難くすると云ふ。

〔通釋〕 自分は皆が思ひをかけてゐて中々手によう入れないと云ふ安見兒を自分の者にすることが出來た。

天皇(天武)、藤原夫人に賜へる御歌

(二七) わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくはのち。

〔語釋〕 ◎藤原夫人　鎌足の女の氷上娘か、又はその妹の五百重娘かである。共に召されて夫人となつた夫人は三位以上の者の女の選ばれたもの。◎わが里　皇居のある淨御原。◎大原　大和高市郡飛鳥村大字小原で、夫人の實家のある處。◎古りにし里　以前榮えてゐて、後衰へさびれたから云ふ。◎降らまく　降らむ事はの意。

て、その新宅を祝ふ言を以て結び、一篇の構想實に整然としてゐる。

【批評】ぢつとしてゐられないやうな切な感情がよく表れてゐる。

は、草木の穂ばかりでなく、すべて表面に表はれるもの。それでこの句は、白栲の色のやうに白々といふ意で、下の霜の形容。◎磐床と云々　川の水が岩床となつて氷つてゐること。◎通ひつゝ　幾夜も通ひながら。◎千代までに　何時〳〵までも。

【通釋】天皇の勅令を畏り奉じて、久しく住み慣れた故郷の家を離れ、泊瀬川に舟を浮べて漕ぎ行く川の曲り目毎に幾度か振り返りながら、名殘を惜しみつゝ行くうちに日が暮れて、やがて奈良の都を流れる佐保川に至つて、舟中に寢て、翌朝かけて寢てゐる夜着から首を出して有明月の光りではつきり見ると、白栲の色のやうに白々と夜の間に霜が降つてをり、川の水は岩床のやうに固く氷つてゐる寒さのきびしい夜も休むことなく通ひながら造つたこの家に、何時〳〵までもお住みにならせられるわが君をお慕ひ申して、自分も永く通つてお仕へ申さう。

巻二

磐姫(いはのひめ)皇后、天皇(仁徳)を思ひて作りませる歌

(二四)　君が行(ゆき)け長くなりぬ山たづの迎へか行かむ待ちにか待たむ。

【語釋】◎君が行　「行」は動詞か行四段の連用形からなつた名詞。「歩み」などと同じ。◎け長く　日長く。◎山たづの　迎への枕詞。◎迎へか行かむ　迎へに行かうか。◎待ちにか待たむ　何時までも待つてゐようか。

【通釋】君が旅にお出ましになられてから、よほど日數が經つてゐる、お迎へに行かうか、それとも我慢してぢつとお待ち申してゐようか。さて〳〵待ち遠いことである。

ひ、すべて故郷を偲ばせずには置かぬものばかりである。景情まことによく一致してゐる。

【説評】この作者はまだ藤原の里に殘つてゐた工匠などで造つた家は高貴の方のであらう。初めに、勅命のまゝに人々が奈良の都に居所を移すことから歌ひ起し、次に藤原から奈良までの道中のことを叙し、次に、寒い日も厭はず通つた勞苦を云ひ最後に、家が出來上つ

歴代の天子の行幸があつた　◎志貴皇子　天智帝の皇子。　◎羽がひ　兩翼。

【通釋】旅にあつては、殊に故郷が戀しいものであるが、今夜のやうに、葦邊を飛んで行く鴨の翼にまで霜が置く程寒い夕には、ことさら故郷の大和が思はれる。

藤原宮より寧良宮に遷りませる時の歌

（三三）おほ君の　みこと畏み　にきびにし　家をさかりて　こもりくの　泊瀬の川に　舟浮けて　わが行く川の　川隈の　八十隈おちず　よろづたび　顧みしつゝ　玉桙の　道行き暮らし　あをによし　寧樂の都の　佐保川に　い行き至りて　わが寢たる　衣の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　たへのほに　夜の霜降り　磐床と　川の水凝り　冷ゆる夜を　いこふことなく　通ひつゝ　造れる家に　千代までに　來まさむ君と　我も通はむ。

【語釋】◎寧良・寧樂　奈良に同じ。奈良遷都は元明帝の和銅三年三月である。　◎みこと畏み　遷都の勅を畏り奉じて。　◎にきびにし　久しく住み慣れた意。　◎さかり　離れ。　◎こもりくの　泊瀬の枕詞。　◎泊瀬の川　磯城郡の東北から發し、生駒郡に入つて佐保川と合し、西流して大和川となる。　◎舟浮けて　舟に棹さして。　◎川隈　川の曲り角。　◎八十隈　川の多くの曲折。　◎おちず　殘らず。　◎玉桙の　道の枕詞。　◎道行き暮らし　佐保川を行つて日が暮れたこと。　◎佐保川　水源を春日山に發し、佐保山の麓を過ぎて郡山の東を南流して大和川に合してゐる。　◎い行き　「い」は接頭辭。　◎衣の上ゆ　衣の上から。これは舟中に寢て、翌朝目が覺めて、着て寢てゐる着物から首を出して見たのである。　◎朝月夜　有明の月。「夜」はただ添へただけである。　◎さやかに見れば　月光ではつきり見ると。　◎たへのほに　「たへ」は栲で、楮の皮の纖維で織つた白い布。「ほ」

地であるから、實際は近いのであるが、急に荒れ果てたのを見ては遠い感もするだらう。「いたづらに吹く」と云つた所にいかにも、もの淋しさが感ぜられる。

【鑑評】「濱松待ち戀ひぬらむ」と云つた底には、家人が待ち佗びてゐるであらうと云ふ意味がこもつてゐる。なつかしい故郷に早く歸りたいと思つてゐる心が明かに察せられて、同情させられる。

【鑑評】旅と云ひ寒い夕方と云ひ、葦邊を飛ぶ鴨と云

藤原宮　高市郡鴨公村大字高殿の附近にあつたと云ふ。持統帝の四年に起工し、同八年十二月に淨御原宮から遷都せられた。◎志貴皇子　天智帝の皇子で、光仁帝の御父。◎采女　宮女。◎明日香風　飛鳥の地を吹く風。◎遠み　遠い故に。

【通釋】これまで都があつた時には、多くの采女達の美しい衣の袖を吹いた飛鳥の風も、今は都が遠くへ遷されたので、空しく吹いてゐる。

（二二）いざ子どもはやく日本（やまと）へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ。

山上憶良（やまのへのおくら）、大唐（もろこし）に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌

【語釋】◎山上憶良　聖武天皇の天平五年歿、年七十四。◎いざ　さあ。◎子ども　從者などを親しんで指したのである。◎大伴の御津　大伴は攝津國西成郡雄伴郷の地で、御津はそのうちにあつて、今日の大阪の長堀・道頓堀のあたりに當ると云はれてゐる。◎濱松　濱邊の松。

【通釋】さあ、皆の者よ、早く日本へ歸らうではないか、大伴の御津の濱松も我々の歸るのを待ち佗びてゐるであらう。

【[illegible]】これは文武帝の大寶元年正月に、粟田眞人が遣唐大使として入唐した時、憶良は四十二歳で、遣唐小錄として渡唐し、三年ほど經て、慶雲元年七月に歸朝したがまだ唐にゐる頃詠んだものである。

（二三）葦邊行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ。

慶雲三年丙午、難波宮に幸せる時、志貴皇子の作りませる歌

【語釋】◎難波宮　難波長柄の豐崎宮　今の西成郡豐崎村の長柄の地である。孝德帝の白雉二年十二月に遷都され、五年の後、再び元の飛鳥の地に復舊せられた。しかし、その後も、難波宮は離宮として、

たましく感じたのである。

【批評】妻が旅に出てゐる夫の身の上を思ひやつて詠んだ歌である。何の技巧もないその率直さが實にいゝ。

【批評】これは作者が輕皇子に隨つて安騎野に宿つた時に詠んだ長歌一篇の後に載せた四首の短歌のうちの第三首である。廣々とした野中の夜明けの雄大な光景が遺憾なく寫されてゐる。

【批評】藤原宮は飛鳥に續いた

めやも 逢へようや、逢へない。

【通釋】その昔、大宮人達が舟を浮べた滋賀の大輪田は昔のまゝに淀んで待つてゐても、昔の人に再び逢ふことは出來ない。

當麻眞人麿の妻の作れる歌

(一八) わが背子はいづち行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ。

【語釋】◎背子 女子が男子を敬つて呼ぶ稱。◎沖つ藻の 名張の枕詞。◎名張の山 伊賀の國にある。

【通釋】旅に出た夫は今頃何處を行つてゐるであらう、今日あたりは名張の山を越えてゐるであらうか。どうぞ無事に歸つて來て下さればいゝが。

輕皇子の安騎野に宿りませる時、柿本朝臣人麿の作れる歌

(一九) ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ。

【語釋】◎輕皇子 天武帝の皇子草壁皇子の第二王で、後の文武天皇。◎安騎野 大和國宇陀郡の西部の野の古名。◎ひむがし 東。◎かぎろひ 夜明け方のほの明り。◎かへり見 顧み。

【通釋】東の空を見ると、はやぼうと赤く染まつて、夜もまさに明けようとしてゐるが、後方を振り返つて、西の空を見ると、月は山に傾いてゐる。

明日香宮より藤原宮に遷居りまし後志貴皇子の作りませる歌

(二〇) 采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く。

【語釋】◎明日香宮 飛鳥淨御原宮のこと。天武帝の御世から持統帝の初年にかけて都のあつた所。◎

る。それが少しも、きざに響かないで、いかにも美しく響いて、内容に一種のおもむきを添へてゐる。

【批評】美しい新緑の香具山を背景とした、民家に着物が乾してある、實に新鮮な、如何にも初夏らしい光景である。その御表現はまことに高古素朴である。

【批評】作者の眼には大宮人達の舟を寄せる姿が彷彿として浮び、そして空しく消えたであらう。

【批評】大輪田を擬人化して、作者がい

【語釋】◎吉野　吉野郡中莊村大字宮瀧の地で、こゝに離宮があつた。◎よき人　貴い人。賢い人。◎よく見て　よく注意して見て。

【通釋】古の貴い人がまことに立派な處だとよく見て云つたその吉野をよく見よ、實によい處ではないか古の貴い人はよく見たものである。

天皇（持統）の御製の歌

（一五）　春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山。

【語釋】◎來るらし　來たらしい、◎白妙の　衣の修飾語。

【通釋】まだ春だと思つてゐたのに、何時の間にか春も終つて、夏が來たらしい。外を見ると民家には着物が乾してあり、香具山は新緑のよそほひが美しい。

反　歌

（一六）　さざなみの滋賀の辛崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ。

【語釋】◎滋賀の辛崎　今日の近江八景の一。◎幸く　無事。變りなく。◎舟待ちかねつ　舟を待つてゐてもその甲斐もない。

【通釋】その昔、大宮人達が舟を寄せた滋賀の辛崎は昔のまゝに變らずあるが、しかし何時まで待つても、大宮人の舟の來ることはもはや再びない。

（一七）　さざなみの滋賀の大輪田淀むとも昔の人に又も逢はめやも。

【語釋】◎大輪田　唐崎のあたりにあつたものと思はれるが、今日は埋れて陸地と變つてゐる。◎逢は

【鑑評】これは、天智天皇が、近江の蒲生郡に遊獵された時、お供してゐた額田女王が皇太弟の大海人皇子に對しての詠歌である。周圍を憚る心が、いかにも女らしい優美さで現はれてゐる。

【鑑評】「紫のにほへる」は女王の歌の「紫野」を受けて云つたので、巧みな用ゐ方である。「人妻故にわれ戀ひめやも」とは實に濡ましい熱情である。

【鑑評】各句に「よ」と云ふ頭韻が蹈んである。

れゝばいゝのに、あんなに無情に隱すべきであらうか。

天皇（天智）蒲生野に遊獵し給へる時、額田王の作れる歌

（一二）あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖ふる。

【語釋】◎蒲生野　近江國蒲生郡にある野。　◎あかねさす　紫の枕詞。　◎紫野　紫草の生えてゐる野　◎標野　御獵のために占め置かれる野。　◎野守　野の番人。こゝは周圍の人をかく云つた。　◎袖振る　愛情をあらはすしるし。

【通釋】紫草の生えてゐる御獵の御料地を行きながら、君がしきりと私に向つて袖をお振りになるが、そんなことをして人目につくではありませんか、お愼しみ下さいよ。

皇太弟の答へたまへる御歌

（一三）紫のにほへる妹をにくゝあらば人妻故にわれ戀ひめやも。

【語釋】◎皇太弟　大海人皇子。　◎紫の　にほへる妹の枕詞。　◎にほへる妹　匂ふやうに美しい妹。　妹は男子から女子を親しんで呼ぶ稱。　◎人妻故に　人の妻であるものを。　◎戀ひめやも　戀ひようか？戀ひはしない。

【通釋】紫草の色のやうに美しいそなたを、にくかつたら、人の妻であるのを、どうして戀ひるものか。可愛いゝからこそこんなに戀ひるのではないか。

天皇（天武）吉野宮に幸せる時御製の歌

（一四）よき人のよしとよく見てよしと云ひし吉野よく見よよき人よく見つ。

つてゐるので、山に入つて折取ることも出來ず、草が深いので取つても見ない。ところが、秋山の木の葉を見る時には、美しい黄葉は手に折り取つて賞翫し、青い葉は枝に置いたまゝで、早く黄葉すればよいなあと思ひながら眺める。それが中々樂しい。だから自分は秋山が勝つてゐると思ふ。

額田王近江國に下りし時、作れる歌

（一〇）うま酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山のまに　い隱るまで　道の隈　い積るまでに　つばらにも　見つゝ行かむを　しばしばも　見さけむ山を　こゝろなく　雲の隱さふべしや。

【語釋】◎うま酒　三輪の枕詞。◎三輪の山　三諸山とも云ふ。大和磯城郡三輪町の東方にある。◎あをによし　奈良の枕詞。◎奈良の山　奈良の春日山の西北に連る小丘。◎山のま　山の間。山の際。◎い隱る　「い」は接頭辭。◎隈　曲り角。◎つばら　よく。つまびらか。◎見さけ　遠く眺める。◎こゝろなく　無情。◎隱さふ　隱す。「ふ」は動作の繼續をあらはす助動詞。

【通釋】三輪の山が奈良の山の間に隱れてしまふまでは、幾曲りも曲つて遠く道を行くまでは、よく／＼眺め何度も振り返つて見たい山であるのに、それを無情にも雲が隱してしまふとは不都合である。

反歌

（一一）三輪山をしかも隱すか雲だにもこゝろあらなむ隱さふべしや。

【語釋】◎しかも　あんなにも。◎雲だにも　せめて雲だけでも。◎こゝろあらなむ　「心があつてほしい。「なむ」は希望の助詞。

【通釋】三輪山をあんなにすつかり隱して了つた。ほんとに恨めしい。せめて雲にだけでも心があつてく

【批評】これは、飛鳥から近江の大津に遷都のあつた時、作者が飛鳥を去つて近江に行く道中での作である。なつかしい故郷の山を振り返り／＼名殘惜しさうに行つてゐる作者の恨み深い感情が遺憾なく現はされてゐる

【批評】訴るが如く、恨むが如く、泣くが如き悲痛のひびきがある。

〔通釋〕香久山と耳梨山とが、畝火山をわが妻にしようとして爭つた時、出雲の阿菩大神が立つて見に來られたと云ふ印南野は此處である。

（八）わたつみの豐旗雲に入日さし今宵の月夜（つくよ）あきらけくこそ。

〔語釋〕◎わたつみ　海。　◎豐旗雲　「豐」は美稱の接頭辭。「旗雲」は、旗のやうになびいてゐる雲。◎入日さし　夕日が照り輝く。　◎月夜　「夜」はただ添へただけ。　◎あきらけくこそ　明かであつてくれ。「こそ」は希望の助詞。

〔通釋〕海上遙かにたなびいてゐる美しい旗雲に赤々と夕陽がさしてゐる。どうか今夜の月はさやかに照つてくれ。

【批評】壯大な光景と雄渾の調が相俟つて、實に朗々誦すべき千古の名作である。

天皇（天智）、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の萬花の艷と秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時、額田王、歌を以てことわれる歌

（九）冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山をしみ　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黃葉（もみち）をば　取りてぞしぬぶ　青きをば　置きてぞ歎く　そこしたぬし　秋山われは。

〔語釋〕◎内大臣藤原朝臣　藤原鎌足。　◎ことわれる　判定する。　◎冬ごもり　春の枕詞。　◎春さりくれば　春になると。「さり來れば」は「シアリ來レバ」の約。　◎しみ　茂つてゐる故に。　◎深み　深い故に。　◎しぬぶ　賞翫する。賞美する。　◎置きてぞ　枝に置いたまゝで。　◎そこし　それが。「し」は强意の助詞。　◎たぬし　樂しい。　◎秋山われは　私は秋山が面白いと思ふ。

【批評】春は木が茂り、草が深くて入られないと云つたところはいかにも女性らしい恨みだ。秋山に味方したところに、この作者の性格の一面もうかゞはれる。

〔通釋〕春になると、今まで鳴かなかつた鳥も來て鳴き出すし、咲かなかつた花も開くけれども、木が茂

見るやうである。

【批評】この歌は表面は三山の傳說であるが裏面は中大兄の皇子が御弟の大海人皇子と額田女王をお爭ひになつた御心の惱みをお詠ひになつたものと思はれる。この事は後の壬申亂の一原因ともなつたものである。高貴の御方だけに露骨にお詠ひになることが出來なかつたのであらう。

【批評】どこまでも裏面の心を隱さうとせられたのであらう。

〔通釋〕にぎた津に向つて舟を乘り出さうと用意して月の出るのを待つてゐると、いよ／＼月も出で、その上、潮も滿ちて來て、ます／＼舟出するのに好都合となつた。さあ、船を漕ぎ出さう。

中大兄(なかのおほえ)、三山の歌一首

（六）香具山は　畝火(うねび)を愛(を)しと　耳梨(みみなし)と　相爭ひき　神代より　かくなるらし　古(いにしへ)も　しかなれこそ　現身(うつせみ)も　妻を　爭ふらしき。

〔語釋〕◎中大兄　天智天皇の皇太子の御時の御名。◎三山　香久山・畝火山・耳梨山。何れも大和國磯城郡にあつて、大和平野に鼎の足のやうに三ケ所にある山。◎畝火山を愛し　畝火山は女山で、それを香具山が愛してゐるのである。◎現身　人間の身。

〔通釋〕香具山は女山の畝火山を愛して、男山の耳梨山と妻爭ひをした。かく互に妻にしようと爭ふことは神代からあつたことらしい。古もさうであればこそ、我々人間が妻を相爭ふのも尤もなことであらう。

〔參考〕この三山の傳說は播磨風土記によると、三山が妻爭ひをしてゐる時、出雲の國の阿菩の大神が、それを諫止しようと出雲を立つて、播磨まで來られた時、既に三山が和睦したと聞いて、遂にその地に鎭まり給うたと云ふ。

反　歌

（七）香久山と耳梨山とあひし時立ちて見に來(こ)し印南國原(いなみくにばら)。

〔語釋〕◎あひし　相爭つた。◎立ちて見に來し　この上に、出雲の阿菩大神が、の主格が省かれてゐる。◎印南國原　阿菩大神が三山の爭ひを諫止しようとして來られた途中の野で播磨にある。

【語釋】◎內野　今日の大和宇智郡の野。◎中皇命　古義に依ると、「命」は「女」の誤であるとして「ナカチヒメミコ」と訓んでゐる。さうすると、舒明天皇の皇女で、後に孝德天皇の后にお立ちになつた間人皇后である。◎間人連老　中皇女の御乳母の一族であらうと云はれてゐる。◎やすみしゝ　君の枕詞。◎わが大王　「わが」は親しんで云つたもの。◎い倚り立たしし　ものに寄りかけてお立たせになつた。「い」は接頭辭。◎御執らし　御手に執り給ふ。◎梓の弓　梓は樺木科の木で、ミヅメ一名ヨグソミネバリとも云ふ。◎長弭　弭の長いもの。弭は弓の端の弦をかける所。

【通釋】わが大君が朝には御手に執つてお撫でになり、夕べにはものに寄りかけてお立てになつて、大事にあそばされる梓の弓の弭の音がする。これから獵にお出でになられるので、その手ならしをなされると見える。まああんなに勇ましく梓の弓の弭が鳴つてゐる。

反歌

(四) たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野。

【語釋】◎たまきはる　內の枕詞。◎並めて　並べて。◎朝踏ます　朝獵に踏み給ふ。「す」は敬語助動詞。

【通釋】今頃は天皇は從者等と馬を並べて宇智野で朝獵をあそばしていらつしやるだらう、あの草の深く生ひ茂つた野で。

額田王の歌

(五) にぎた津に船乘りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな。

【語釋】◎額田王　鏡王の女で、天武天皇の妃となつて、十市皇女を生んだ方。◎にぎた津　伊豫の湊の名。◎潮もかなひぬ　潮が滿ちて舟出するのに都合よくなつた。

は……」「朝獵に……」と「夕獵に……」との對偶、及び「御執らしの梓の弓の音すなり」の繰り返しが、いかにも流麗で氣持よく響く。

【説評】廣々とした草深い野に君臣うち群れて獵を催していられる壯快な光景が彷彿として眼前に浮ぶ。

【説評】月明の夜滿潮の海に舟出しようとしてゐる壯快な光景が目に

素朴味が現はれてゐてゆかしい。

【説話】天皇の御滿足あそばしてゐる御樣子が察し奉られる。國原には炊煙、海原には鷗、何と云ふ平穏さであらう。

【説話】天皇の獵にお出でかけになる時の勇ましい光景が躍如としてゐる。「朝には……」と「夕に

聞きたい。又名を聞かして下さい。この大和の國は、すべて朕が治めてゐるのであるぞ。何處までも朕が支配してゐるのであるぞ。では朕から先に家をも名をも告げよう。

天皇(舒明)香具山に登りて、望國したまへる時御製の歌

(二) 大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　國見をすれば　國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし國ぞ　あきつ島　大和の國は。

[語釋] ◎香具山　大和國磯城郡香久山村にある。◎望國　國見と同じ。山上から國土を觀察又は眺望して樂しむこと。こゝは後の意。◎群山　群つてゐる多くの山々。◎とりよろふ　「とり」は接頭辭。「よろふ」はものゝ足り具はること。◎天の　この山は天から降つて來たと云ふ傳説があるので附けた。◎國原　廣々とした平野。◎煙立ち立つ　炊煙が盛に立つ。民の賑はしいさま。◎海原　こゝは香具山の麓にあつた埴安池を云ふ。◎うまし　美しい。◎あきつ島　大和の枕詞。

[通釋] 大和には澤山の山があるが、その中で形のよくとゝのつた山は天の香具山である。その山上に登つて國土を見渡すと、四方の國土には炊煙が盛に立ち上つてをり、山麓の埴安池には鷗が飛び立つてゐる。あゝ大和の國は美しい國である。

天皇(舒明)内野に遊獵し給へる時、中皇命、間人連老をして獻らせたまふ歌

(三) やすみしゝ　わが大王の　朝には　とり撫でたまひ　夕には　い倚り立たしし　御執らしの　梓の弓の　長弭の　音すなり　朝獵に　今立たすらし　夕獵に　今立たすらし　御執らしの　梓の弓の　長弭の　音すなり。

萬葉集新釋

末政寂仙著

卷一

天皇(雄略)の御製の歌

(一) 籠もよ み籠持ち ふぐしもよ みふぐし持ち この丘に 菜摘ます兒 家聞かな 名のらさね そらみつ やまとの國は おしなべて 吾こそをれ しきなべて 吾こそませ我こそはのらめ 家をも名をも。

【語釋】 ◎籠もよ 「籠」はかご。「も」「よ」は二字とも感動の助詞。 ◎み籠 「み」は美稱の接頭辭。 ◎ふぐし 掘串の義で、今日の箆のやうなもので、菜などを掘り取るに用ゐるもの。 ◎菜摘ます兒 「す」は敬語助動詞。 ◎聞かな 聞きたい。「な」は希望の助詞。 ◎名のらさね 名を告げなさい。「さ」は敬語助動詞。「ね」は希求の助詞。 ◎そらみつ 大和の枕詞。 ◎やまと 日本全國の意。 ◎おしなべて 押並べての義。全部。 ずつとすつかり。 ◎しきなべて 敷き並べての義。 ◎吾こそませ 自分がゐる。「ませ」は敬語「ます」の已然形。

【通釋】 立派な籠を持ち、掘串を持つて、この岡で菜を摘んでいらつしやる小女よ。そなたの家は何處か

【批評】 畏くも一國の天子が、岡邊に菜を摘んでゐる田舍娘に詠みかけ給ふた御製である。その御言葉の御鄭重さ、まことに畏れ多い極みである。實に君臣一體の美はしき古代の平和なさまが想像せられる御調の整つてゐないところにも却て

閏三月、天平寶字四年衛門督大伴古慈悲宿禰の家にて入唐副使同じき胡麿宿禰等を餞せる歌……八〇
二十三日(天平勝寶五年二月)興に依りて作れる歌二首……八一
二十五日作れる歌……八一

巻二十

病に臥して無常を悲しみ、修道を欲して作れる歌……八三
壽を願ひて作れる歌……八三
三年(天平寶字)春正月一日、因幡國廳に於て、饗を國の郡司等に賜へる宴の歌一首……八四

—目次終—

新田部親王に獻れる歌……七五
戯に僧を嗤る歌……七五
法師の報ふる歌……七六
夫君に戀ふる歌……七六
能登國の歌……七七

卷十七

左大臣橘宿禰、詔に應ずる歌……七七
紀朝臣淸人詔に應ずる歌……七八

卷十八

河内女王の歌……七八
反歌……七八

卷十九

天平勝寶二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺矚して作れる歌……七九
夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌……七九
遙に江を泝る船人の唱ふを聞く歌……八〇
勇士の名を振ふ歌……八〇

物に寄せて思を陳ぶ……六七
羈旅に思を發す……六七

卷十三

反歌……六八
柿本人麿の歌集の歌に曰く……六九
問答……六九
反歌……七〇

卷十四

東歌……七〇
防人の歌……七二

卷十五

新羅に遣はさるゝ使人等別を悲しみて贈答し、及海路に情を慟み思ふ陳ぶ。併に所に當りて誦詠せる古歌……七三
長門浦より船出せし夜、月の光を仰ぎ觀て作れる歌……七三

卷十六

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を立ちて海に入る時親母の子に贈れる歌……六二

巻十

鳥を詠める……六二
月を詠める……六三
煙を詠める……六三
野遊……六三
鳥を詠める……六四
花を詠める……六四
雁を詠める……六四
蟋蟀を詠める……六四
霜に寄す……六五

巻十一

正に心緒を述ぶ……六五
物に寄せて思を述ぶ……六六

巻十二

正に心緒を述ぶ……六六

旋頭歌……五四
譬喩歌（王に寄す）……五五
挽歌……五五

巻八

志貴皇子の懽の歌……五六
山部宿禰赤人の歌……五六
厚見王の歌……五六
大伴宿禰家持の鶯の歌……五七
崗本天皇（舒明）の御製の歌……五七
山上憶良、春の野の花を詠める歌……五七
安貴王の歌……五八

巻九

崗本宮御宇天皇（舒明）の紀伊國に幸せる時の歌……五八
弓削皇子に獻れる歌……五八
水江浦島子を詠める歌一首並に短歌……五九
反歌……六一
石河大夫の任に遷されて京に上る時、播磨娘子の贈れる歌……六一

養老七年癸亥夏五月、芳野離宮に幸せる時、笠朝臣金村の作れる歌……四六
神龜元年甲子冬十月五日、紀伊國に幸せる時、山部宿禰赤人の作れる歌……四七
山部宿禰赤人の作れる歌……四七
四年壬申、藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるる時、高橋連蟲麿の作れる歌……四七
反歌……四八
山上臣憶良、痾に沈める時の歌……四八
六年(天平)甲戌、海犬養宿禰岡麿、詔に應ずる歌……四八
冬十一月(天平八年)左大臣葛城王等に、姓橘氏を賜へる時、御製の歌……四九
十年(天平)戊寅、元興寺の僧の自ら嘆く歌……四九
十六年(天平)甲申春正月十一日活道岡に登り、一株の松の下に集ひて飮せる歌……五〇
寧樂京の荒墟を傷み惜しみて作れる歌……五〇
寧樂の故鄕を悲しみて作れる歌一首並に短歌……五一

卷七

天を詠める……五二
雲を詠める……五三
山背にて作れる歌……五三
羈旅にて作れる歌……五三
時に臨みて……五四

大納言大伴卿の和ふる歌……三七
笠郎女、大伴宿禰家持に贈れる歌……三七
豐前國娘子大宅女の歌……三七
安都扉娘子の歌……三八
大伴宿禰家持、坂上家の大孃に贈れる歌……三八
大伴坂上大孃、大伴宿禰家持に贈れる歌……三八

卷　五

太宰帥大伴卿、凶問に報ふる歌……三九
反　歌……三九
子等を思ふ歌……三九
反　歌……四〇
梅　花　の　歌……四〇
聊私懷を布ぶる歌……四一
貧窮問答の歌……四一
反　歌……四四
老身重病年を經て辛苦す、及び兒等を思ふ歌……四四
男子名は古日を戀ふる歌……四六

卷　六

山上憶良、宴を罷る歌……一二五
太宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首……一二六
沙彌滿誓の歌……一二九
石上大夫の歌……一三〇
湯原王、芳野にて作れる歌……一三〇
筑紫の娘子、行旅に贈れる歌……一三〇
羈旅の歌……一三一
勝鹿の眞間娘子の墓を過ぎし時、山部宿禰赤人の作れる歌一首並に短歌……一三一
反歌……一三二
七年(天平)乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去を悲歎して作れる歌一首並に短歌……一三二
反歌……一三四

卷四

額田王、近江天皇(天智)を思ひて作れる歌……一三五
安倍女郎の歌二首……一三五
藤原宇合大夫、任を遷されて京に上る時、常陸娘子の贈れる歌……一三六
大伴坂上郎女の和ふる歌……一三六
太宰帥大伴卿大納言に任られて京に入らむとする時に臨み、府の官人等卿を筑前國蘆城驛家に餞する歌……一三六

太后の御歌一首……一八
天皇（天武）崩じ給ひし時、太后の作りませる歌……一八
短歌二首……一九

卷三

天皇（持統）志斐嫗に賜へる御歌……二〇
志斐嫗の和へ奉れる歌……二〇
長皇子、獵路池に遊びたまへる時、柿本朝臣人麿の作れる歌……二〇
柿本朝臣人麿の羇旅の歌……二一
柿本朝臣人麿、近江國より上り來る時、宇治河の邊に至りて作れる歌……二二
長忌寸奥麿の歌……二二
柿本朝臣人麿の歌……二二
高市連黒人の羇旅の歌……二三
志賀に幸せる時、石上卿の作れる歌……二三
中納言安倍廣庭卿の歌……二三
山邊宿禰赤人、不盡山を望める歌一首並に短歌……二四
反歌……二四
太宰少貳小野老朝臣の歌……二五
沙彌滿誓、綿を詠める歌……二五

反歌……八
當麻眞人麿の妻の作れる歌……九
輕皇子の安騎野に宿りませる時、柿本朝臣人麿の作れる歌……九
明日香宮より藤原宮に遷居りまして後、志貴皇子の作りませる歌……九
山上憶良、大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌……一〇
慶雲三年丙午、難波宮に幸せる時、志貴皇子の作りませる歌……一〇
藤原宮より寧良宮に遷りませる時の歌……一一

巻　二

磐姫皇后、天皇(仁徳)を思ひて作りませる歌……一二
内大臣藤原卿(鎌足)采女安見兒を娶たる時作れる歌……一三
天皇(天武)藤原夫人に賜へる御歌……一三
藤原夫人、和へ奉れる歌……一四
吉野宮に幸せる時、弓削皇子、額田王に贈り與へる歌……一四
額田王、和へ奉れる歌……一四
柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り來る時の歌……一五
反歌……一六
有間皇子自ら傷みて松が枝を結べる歌……一七
天皇(天智)聖躬不豫の時、太后の奉れる御歌……一七

萬葉集新釋目次

卷一

天皇(雄略)の御製の歌……一
天皇(舒明)香具山に登りて望國したまへる時御製の歌……二
天皇(舒明)內野に遊獵し給へる時、中皇命間人連老をして獻らせたまふ歌……二
反歌……三
額田ノ王の歌……三
中大兄三山の歌一首……四
反歌……四
天皇(天智)內大臣藤原朝臣に詔して春山の萬花の艶と秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時額田王歌を以てことわれる歌……五
額田王近江國に下りし時作れる歌……六
反歌……六
天皇(天智)蒲生野に遊獵し給へる時、額田王の作れる歌……七
皇太弟の答へたまへる御歌……七
天皇(天武)吉野宮に幸せる時御製の歌……七
天皇(持統)の御製の歌……八

田女王・茅上女郎等があつて、各々その特色がある。人麿は特に長歌に於て、構想の雄大、格調の莊嚴、修辭の豐麗、赤人は、長歌よりも短歌に秀れて、多く、優しく美しい自然を歌つてゐる。憶良は、官位も低く、而も疾病と貧窮とに苦しめられた結果、現實の悲哀に對する沈痛な精神の現はれた歌が多く、又、自己の悲慘な生活の經驗から人類に對する同情は、愛の精神となつて、子を思ひ、妻をいたはる歌を産んだ。旅人の歌には老莊の虚無思想の影響があり、その調は平明である。家持の歌は集中に四百八十一首の多きを載せ、表現の渾然性はあるが、概して生趣に乏しい。蟲麻呂は多く傳說を歌つてゐるところに特色がある。額田女王の歌は、優雅であり、茅上女郎や笠郎女の如きは、熱情に富んでゐる。

次に歌の題材から見ると、地理的には、大和・攝津地方を中心として、東國・中國・筑紫に至るまで殆ど日本全國にわたつてゐる。品物的には、鳥獸・魚介・草木の類から、器具・服食に至るまで、實に廣汎に亘つてゐる。

「萬葉集」の歌は全部漢字で記してあつて、その漢字の使用は、或は音を以てし、或は訓を以てし、頗る巧妙を極めてゐる。然るにその訓法に何時しか不明となり、平安朝以來、多くの學者に依つて試み研究せられ今日も猶ほ明かでないものが多く殘つてゐる。註釋書も頗る多く、その主なるものには、鎌倉時代に、仙覺の「萬葉集註釋」があり、江戸時代には、下河邊長流「萬葉集管見」・釋契沖「萬葉代匠記」賀茂眞淵「萬葉考」・本居宣長「萬葉玉の小琴」・橘千蔭「萬葉集略解」・鹿持雅澄「萬葉集古義」等があり、明治以後では、木村正辭「萬葉集美夫君志」・佐々木信綱「萬葉集選釋」・次田潤「萬葉集新講」・山田孝雄「萬葉集講義」・澤瀉久孝「萬葉集新釋」等がある。

Oriental Library
PL 758. S8 I

解題

「萬葉集」は、奈良時代の後期に出でた、日本最初の大歌集であつて、「古事記」と共に奈良時代の文學を代表するばかりでなく、實に、日本文學の精華である。

萬葉集と云ふ名目に就いては、萬づの言葉の意に解く說と、萬世の意に解く說とがあるが、後說に從ふべきものに考へられる。

編者と編時とに就いても古來諸說があつて、未だ定說がないが、大體、大伴家持が選んでおいたものを、後、數人の手に依つて、輯成・整理されて行つて、今日の形となつたのは、奈良時代の終りから、平安時代の始め頃であらう。それで、その體裁も半ば整ひ、半ば整はぬところがある。

一部二十卷の中、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合計四千四百九十六首、他に漢詩・漢文が數篇ある。長歌・旋頭歌の多いのも「萬葉集」の特色の一つである。而して、その分類は、雜歌・相聞・挽歌・譬喩・四季雜歌・四季相聞の六部に分れる。

載錄されてゐる作者年代も不明のものが多いが、明かなものに就いて見ると、仁德帝の皇后磐之姫の作から、淳仁帝の天平寶字三年、家持の作に至るまで、約四百四十年を含んでゐるが、その中、仁德帝から舒明帝まで三百年間の作は僅か八篇であるから、主として、飛鳥・奈良時代約百四十年間である。

作者は、上は天皇・皇后から下は遊女・乞食に至るまで、あらゆる階級に亙り、五百六十一人中女の作者七十八人、讀人知らずの歌千八百餘首である。作者名の明かな歌で、その主なる歌人としては柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・大伴家持・高橋蟲麿、女流作家としては、坂上郎女・額

末政寂仙著

萬葉集新釋

學修社版

萬葉集新釋

末政寂仙著

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 008 770 717 0

LEFT
彩
照
姓名：
Name
职务：
Post
单位：
Unit
No:
Date:
002
装得快 文具
24Cc